
神運の子

魔の間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神運の子

【Zコード】

Z2010K

【作者名】

魔の間

【あらすじ】

新王戴冠の日に突然、しかし必ず現れる一人の女。人にあらざる美で、女に狂っていた王を虜にする。 そして今宵また、若き新王の前に女が現れる・・・

1 歴史小説の（讀書会）

そんなに重くない物語になると感心します。
先ほどのうか分かりませんが、とりあえず年齢制限なしで。

1 歴史は語る

ある所に一つの国がありました。

とても広く、とても裕福な国でした。

民は皆、國を統べる王様を愛し、尊敬していました。

しかし、その王様にはたつた一つ欠点がありました。

なんと王様は筋金入りの女たらしだったのです。

東に美女の居る国ありと噂を聞けば、行つてそりい、
西の美しい乙女が助けを求めれば、國の全武力をもつて助け
ます。

そこには国の條約も、悪女も関係ありません。

無理が祟つたのか、國は少しずつ傾いていきます。

田は嘆きました。

ゞひにかしてくれと神に泣き縋り、祈りました。

そんな田々が続いていたある日、一人の女が王様の前に現れます。

その女は、これまでになく素晴らしい美を兼ね備えておりました。

肌は誰よりも白く、髪は光り輝き、田はまるで宝石の様に澄み渡っていました。

あまりの美貌に、一瞬で王様は恋に落ちました。

誰かが噂を流します。

あれは天から舞い降りたのだ。

いやいや、あれは神が我等の嘆きを聞き入れて遣わしてくれさつたに違いない。

いいや、違うともーあれは陛下の運命だつたのだ！

王妃となつた彼女に首つたけな王様は、他の女に見向きもしません。

今之内にとばかりに頑張つた文官達の努力もあつて、国は元の姿を取り戻します。

ほれみるー王妃様はやはり、神が遣わして下さつた方なのだ！

やつぱり王妃様は、陛下の運命の御方だつたんだ！

天を捨ててまで舞い降りられた覚悟に感謝します。王妃様。

様々な場所で議論が飛び交います。

ええいっ！もうどれでも良い！適当にまとめて神運の子として
も呼ばば良かう！

誰が発した言葉だったのでしょうか。

その言葉は瞬く間に広まり、いつしかそれは王妃の代名詞となりました。

神運の子あらざれば、王妃にあらず。

いつしか囁かれ出したその噂を真実とするかのように、新しい王が立つ度に女は現れる様になりました。

いつの世の王も、現れた女に恋い焦がれます。

しかし誰一人として、女が何処から来たのかを知る者は居ません。

まさに神のみぞ知る。

それを不満に思う人は何処にも居ませんでした。

彼のくつりと笑う声が、やけに響く。

それに従つて、彼の隣に居た女も口に笑みを浮かべた。

「ねえ殿下、私こそが殿下の運命なのでしきつ。
だつてこんなにも、殿下は私に会いに来て下せつてこらのだもの」
女が伸ばす手は阻まれる事なく、男の顔に行き着く。ふわりと男
の金髪が揺れた。

「そうだよ。君達は私の選んだ女だ」

「もうつーつれない人！」

私みたいな美人が、他に何処にいると言つのー。」

頬を膨らませて拗ねる女に、男は低く笑う。

「知つてゐるはずだよ？

私の血筋は皆、女狂いだつて。

確かに君達の容姿はとても美しい」

そう言つて、男はまだ機嫌の直らない女に優しく口づける。

そして・・

「でも、君達では私を満足させる事は出来ないのでよ」

残酷な言葉が落とされた。

＊＊＊

「ディレイ・シー・ラジエヌ新王陛下に幸あれ！」

神官が声高らかに言い切った瞬間、耳をつんざく程大きな歓声が響き渡った。それを聞き、今まで神官に跪いていた男が立ち上がる。

流れる金髪に、空色の目。

先王と変わらぬ美貌を宿した、まだ少年の面影の微かに残る青年だった。その美しさに一層歓声が高まる。ラジエヌ王という掛け声が何度も上がっていた。

男 ディレイは笑みを浮かべ、黒山のよつな人だかりに手を軽く振る。

彼を見る女達の顔が赤く変わった。

「・・・まったく罪深いな

新王が入退場をする際に使う扉。その前に立っている警護兵が愚痴を零す。彼の目には新王の美しさにあてられ、次々に倒れる女の姿が見えていた。

「しかしこれも今日までと分かると、本当に嬉しい限りだな

「マレー？ 独り言ですか？」

思考に割り込む様にして入ってきた声に、マレーと呼ばれた警護兵は姿勢を正す。

「いえ、何でもありません

いつの間に壇上から降りてきたのだろうか、そこには新王となつたばかりのディレイが立っていた。白布に金字模様の式服を纏う彼は、同性から見てもかなり美しい。

一人は揃つて扉を抜け、城内の廊下を歩く。

「もう儀は終わつたんだから、その口調は無用だよ。

そもそも何故君が儀場に居るんだ？警護は君の役目ではないはずだよ、マレー將軍？」

「いやーちょっと気になつた事があつてね」

「とか言いつつ、どうせ女だろう？

君もきっと王族と同じくらい女狂いだよ

「いやはやそれは光榮な」

ディレイの苦笑をものともせずに腰を折つてみせるマレー。

武人には珍しく、マレーの黒髪は長い。恋愛成就という昔からある呪いを、健氣にも続けているそうな。

しかしそれに騙されてはいけない。彼はあるの、ディレイと幼馴染なのだ。

切れ長の鋭い黒目に、日に焼けた浅黒い肌。一見瘦身に見える彼の身体は、実に無駄のないインナー・マッスルボディだ。それに、ディレイには劣るもの、彼も十分に整つた顔をしている。

遊んでいないはずがなかつた。

「今日で陛下は女遊びを終わるのかー

「・・何だ、その目は」

マレーにつられて、ディレイも口調が変化する。

「絶世の美女かー・・・・いいなー」

「言つておくが、手を出したら捻り潰すからな?」

「おー怖っ!」

「ま、でも大切にしろよ?」

「勿論だ」

清々しい表情で断言する幼馴染を見て、マリーの頬が緩む。

「おー?早速惚氣かー?」

(これからもこんな日々が続けばいい)

ディレイをからかいながら、彼は幼馴染の門出を祝つた。

それがビビしてあんなってしまったんだらうへ

むらりと妖しく揺れる数多の蠟燭の火が、天井から広間を煌々と照らしている。

その下で、何組もの男女が音楽に合わせて踊っていた。時折彼らが視線を向けるのは、広間の奥の上座に座す新しき國の主。

今宵の戴冠祝いの主役だ。

ディレイは貴族達が踊っているのを眺めつつ、上機嫌に酒を煽っていた。彼の斜め右後ろにはマレーが屹立し、苦笑を零している。

「そんなに飲み過ぎると、神運の子に嫌われますよ？」
お酒臭いって」

マレーの言葉に何も返す事なく、ディレイは隣の空席を見てまた酒を口にする。

「神殿からはまだ何も言つて来ないのですか」「まだ何も」

神運の子は常に神殿の奥に現れた。神の間と呼ばれる密室された部屋に。

女が現れると部屋の扉が白く光り輝く。慌てて中を見れば、左手の甲に花の痣を持つ女が一人立っているのだとか。

「早く」

(「」の手に・・・)

心の内に何故か溢れはじめた焦燥を押さえ込む為に、ディレイは強く拳を握りしめた。

「早く・・・・」

「？・・・陛下？」

尋常ではない彼の様子に気づいたのか、マレーが訝しそうに問う。

マレーへとディレイが口を開こうとした瞬間、バタンと大きな音を立てて広間の扉が開かれる。

不躾な来訪者を、迷惑そうに振り返る貴族達。しかしそれは直ぐに驚愕に変わる。

来訪者が纏うのは白地に灰字の服、神官であった。

神官は小走りで玉座の前まで行き腰を折ると、早口で話し始める。

「新王陛下におきましては此度の戴冠の儀、誠に」

「それは先程神官長からも聞きました。

いいから早く本題に入りなさい」

「・・・はつはい！」

「神運の子が降臨致しました」

「会いましょう」

「は？」

「今すぐ会います」

「いえつしかしそれはつ！まだ準備も整つておりませぬので・・・」

「連れて来て下さい。分かりましたね？」

「・・・は、はい」

可哀相になるほど動搖した神官は、拙い足どりで広間から出て行つた。

「本当にどうしたんだ？何にそんなに焦つている？」

マレーの小さな声が後ろから聞こえる。

(そうだ。私は焦つている。

しかし、何故こんなにも私は焦つているんだ？)

「私にも分からぬ」

身を焼く様な焦燥。少しでも遅くなればまるで何か大事な物を失つてしまつよくな、そんな焦り。

「とりあえず落ち着け。

お前はもう王だ」

ハツとして顔を上げれば、何やら怪訝そうな表情を浮かべた貴族

達が居た。

「一挙一動が周りに影響する。
だからもう少し落ち着け」

深く息を吸つて吐く、吸つて吐く・・・

「落ち着いたか？」

「ああ」

「で、お前がまずやるべき事は何か分かったか？
・・・・・とりあえず神官に対する労いか？」

「おい、それ素で言つてんのか？
まずやるべきは、俺への感謝だ」

ビシリと自分を指差して、ニヤリと笑むマレー。

彼の気遣いによってか、徐々にディレイの中の焦りは薄れてゆく。

(ありがとう)

氣恥ずかしさから、ディレイは心の中で感謝をした。

そして再び広間の扉が開かれる。

息を止めて見つめる先に、運命はあるのだ。

2 新王戴冠（後書き）

ちなみに

戴冠時の年齢設定

マレー 18歳

ディレイ 17歳

3 彼女の生まれた世界

イタイ

私の日常はその思いで始まつて終わる。

場所は、1LDKマンションの狭い一室。
敵が居ないのを確認して、私はゆっくりと身を起こした。

そう、敵。あれは親なんかじゃない。

「・・・・・」

まだ痛みの残る手を見つめる。

何度も何度も傷つけられた手は、傷痕や痣だらけ。手の甲には赤く丸い斑点が数箇所にある。

昨日、灰皿代わりに使われた所だ。

何度か手を動かしてみるが、動きに支障はない。

私は立ち上がりうつとて・・

「やつと戻きたんだ。」のノロマフー・」

絶叫した。

髪がぐいっと上に引っ張り上げられている。頭全体に痛みが走った。もしかしたら何本か皮膚ごと抜けたのかもしれない。

(敵が何故ここに?..)

「お前ホント、田障りよ。
食べ物もほとんど食べられないのに、何で死なないのかしら?..」

髪を掴む手を離したかと思えば、今度は腕を捻り上げる。

「確か、『キブリは水だけで生き延びられるんだったっけ?
『キブリは害虫だわ。やつぱり殺さなきや!』

ギリギリといつ音が聞こえそうなほど強く握られる。

「・・・・・!..」

「ホント、田障りな子」

敵は私を突き飛ばし、鳴り響く携帯の音と共に家から出て行った。

腕の掴まれた部分は、変色している。

(いたい・・・)

現実から逃避する為に、私は意識を手放した。

「ふふふ・・・そうよ。そうよそうよ!
何で今まで気付かなかつたのかしらー!」

意識を取り戻して見た物は、薄い肌色ストッキングを履いた一対の足だった。

(・・・敵! !)

あまり力の入らない腕を叱咤して上半身を起こし、敵から距離を取る為に精一杯後退る。

「そうしてると、本当に『キブリみたいね。
でも、いいわ。殺すのに躊躇しなくて良さそう』で」

うふふふと満面の笑みを浮かべて、敵は包丁を片手にこちらへと

近づく。その用途は明らかだった。

「何故早くこうしなかったのかしら？」

・・・ああ、でも苦しんでくれたなら意味はあったわ。ふふつ

（まだ死にたくないつ！）

私は力を振り絞って敵の足を蹴りつけた。

「ぐつ、この！…！」

逆上して大振りに振られる包丁を、なす術もなく見つめる私。

（私は死ぬんだ）

そう、思った。

その時、光が視力を奪った。

ザワツと辺りが騒ぐ。

(敵・・じゃない)

薄く目を開けると、群青色の天井が見えた。キラキラと光る何かを点々と含んだ天井は、まるで星の浮かぶ夜空の様だ。

(きれい)

カツ、カツ

人の足音が近づくのを感じて、私は慌てて起き上がる。

ズキリと腕が痛むが、そんな痛みは今更のこと。

「神運の子よ、我らと共に

人はすぐ傍に居た。

綺麗な白髪に翠の目。少し皺の出始めた顔を柔軟に微笑ませ、その男は膝をついた。

彼の着る白い服の裾が、群青の床に舞つた。

「私の名はムギナ。神に一生を捧げた身にござります。

ああ・・ああどうかそんなに怯えないで下さい。

私達神官は貴女を守る為にも存在しているのです

微笑みから一変、悲しげな表情へ。

敵とは明らかに違う、その慈愛に満ちた表情に少し身体の力が抜ける。

警戒を緩めた事が分かったのか、ムギナは安堵の息を吐く。

「貴女は我が國ラジエヌが求める者。

いかにその御身を王が拒否なさるうと、我らがお守りします。た
とえ我が命を懸ける事にならうと、この誓いは変わりませぬ。
どうか私達に信頼をお預け下さい」

何かを堪える様にムギナは告げた。

(「()は一体何処なのだろう・・?
この人は一体何を言つて居るのだろう?」)

私の頭にはそんな思いばかりが回って、ムギナの言葉は全て素通りしていた。

ムギナはそんな私を痛ましい目で見、自身の背後へと視線を送る。

彼の背後には彼と同じく、白地に灰模様の服を着た人達が立っていた。

そして、その中から一人の女性が私の元へと歩み寄る。

「シユリルです。これから貴女に付き従う者、どうかお見知りおきを」

ムギナの紹介と同時に、シユリルと呼ばれた女性が深々と腰を折った。

お団子状に纏めた海色の髪に紺色の目。パチリとした目は、私を興味津々に見ている。見た感じでは、敵である母親と同じ位の歳の人。

「・・・」

ビクビクとしながらも頭を下げる私を見て、シユリルの表情が華やいだ。上気して赤くなつた頬を、彼女は恥ずかしそうに俯いて隠す。

(きれいな人)

シユリルに対する私の第一印象は、まさにそれだった。

「ムギナ様、この方はまさに神運の子ですわー」

「そうだな。」

しかし、それを陛下がちゃんと理解下さるかどうか・・・

何せ、あの方は常に美女ばかりを相手なさって来たのだからな」「もし陛下が打ち捨てられるとおっしゃるなら、私は何としても陛下を許しませんわ！」

田の前で繰り広げられる会話に追いつけない私。

元々、義務教育しか受けられなかつた私は頭が悪い。

「とにかく時間を置くべきだろ？」「

「ええ・・私もそれが一番だと思ひます」

二人の話が纏まつたのか、シユリルがゆっくつといひながら近付いて来る。

「御名をお聞きしても宜しいでしようか？」

「雪」

「ユキ様ですねー！」これから用の際は何なりと、このシユリルに言い付け下さいましー！」

本当に小さな声で言つたのに、聞き取られてしまつた。シユリルは嬉しそうに笑う。

(なんで笑うの?)

意味が分からなかつた。

「大変です、ムギナ様っ！」

そう言つて駆け込んで来たのは、若い男。

「落ち着け。一体何をそんなに慌てている?
ちゃんと陛下に報告はしたのだろうな?」

血の引ききつた顔の男に、ムギナが懲とゆつくりとした口調で問
い掛けた。シユリルはそれらを何故か冷たい表情で見つめている。

ムギナに諭され、男は深く深呼吸をする。そして私に氣づくと
礼をし、再びムギナに向き直った。

「陛下が今すぐお会いになりたいと

「・・なんとつ!」「なんですつて!」「何やうに酷く焦つてゐる様でした」

その言葉に、今度はムギナとシユリルの顔色が悪くなる。

「そんないーそれではもつ・・・ー!」

「落ち着け、シユリル。

王も何かを感じられたのやもしけぬ。
それに賭けてみるしかな!」「もし何かあれば傷付くのはコキ様ですわ!

「私、反対です!」「シユリル!

「これは王命だ。逆らつ事は許されん」

シユリルの紺色の目から涙が零れた。

やつぱり状況の分からない私は、シユリルの辛そうな顔の意味も理解出来ない。

「…………」

私の身体が硬直するのも構わずに、シユリルは私を抱きしめた。突然で初めての感触に、思わず身体に震えが走る。

「お守り致します。

この先何があろうと、私はユキ様のお傍に居続けます。
だからどうか・・どうか」

私が居る事を忘れないで下さい。

(温かい。
この人は温かい)

「シユリル」
「分かつてあります。
・・誰か、せめて神官服を」

名残惜しげに離された身体は、まだほんのりと温かく感じられた。

シユリルは、誰かから受け取った白い服を私に着せてゆく。それは彼女達が着ている物と同じだった。

大きい服が、私の身体の首から下全てをすっぽりと覆つてしまつた。

シユリルに背を押され、引きずる服に足をつつかえさせながら私は歩く。前にはムギナが居た。

「ムギナ様、私はここで」

そうシユリルが言つたのは、大きな扉の前だつた。

扉の両脇には槍を持つ兵が立つてゐる。

「ああ」

シユリルの代わりにムギナが、今度は私の背に手をそえる。

いつの間にか、身体の震えは止まつていた。

「何があらうと、私達はユキ様の味方です」

そのムギナの言葉と共に、私達は歩き出す。

そして扉は開かれた。

3 彼女の生まれた世界（後書き）

・・・残酷描写に引っかかる？

4 王様の判断

扉の閉じる、ガタンとう音がやけに響いた。

音楽溢れる夜会において、こんなにも重い静寂はかつてない事だつた。

「陛下、神運の子にござります」

低く、しかし心地好い声が辺りに届いた。ムギナ 神官の官首かんしゅ
である。

跪く彼の横で棒立ちになる女。それこそが王たるティレイの望みである・・・・はずだった。

ギリリと奥歯が音を鳴らす。

膝に届くのではといつ程に長く艶のない黒髪。その隙間から見える青白く無表情な顔は、醜悪だった。

両瞼は紫色で腫れ上がり、その所為もあってか目は細長い。頬も痩け、まるで亡靈の様だ。

それを見た瞬間、行き場のない怒りが込み上げる。

「ディレイはその怒りを、女があまりにも醜悪すぎた所為だと思つた。」

「馬鹿にしてござりますか？」

怒氣を多分に含んだ声が、広間に行き渡つた。

神運の子の醜惡を口々に囁いていた貴族達は、ピタリと口をつぐむ。

「これまでに無いほど王が怒つていると分かったからだ。」

貴族達は固唾を飲んで、しかし何処か画面や、ディレイとムギナの様子を観察する。

「いえ、馬鹿にしてなどおりませぬ。」

「この方こそが今代、神運の子に間違いないぞこません。その証拠がこれです」

ムギナは女の左手を持ち上げ、長々とした神官服の袖をまくつ上げる。

そこには紅に色づいた丸い点が四つ。まさに花の紋様だった。

「神運の子は類い稀なる美しさを兼ね備えていると聞きます。

しかし、その者は何処からどう見ても醜女ではありませんか」

ディレイの言葉に、愛妃の座を未だ狙う貴族の女達は忍び笑いを漏らす。

「私はその女を神運の子とは認めません。

まして妃など・・その顔で図々しい。

マレー、そこの女を殺してしまってなさい。私を侮辱した罪は重い

背後に居たマレーが、ディレイの横をすり抜ける。

「お待ち下さい！」

この方は容姿によらず、神の選ばれし子なればつて一切捨てるなど言語道断！

痴情のもつれから怒った王が過去に神運の子を殺め、その後国がどうなったか！「ご存知でしょう！」

「・・・・マレー」

マレーは剣を抜こうとした動作を止め、立ち止まる。

「ならば、ムギナ。貴方はそれをビリヒリとへ。
「神を敬い、妃になさいませ」

ざわづと広間が騒ぐ。

「そして辺境の地へお飛ばし下せ。

そうすれば体面は立ち、かつ以後陛下の氣を煩わせる事もありま
すまい」

「・・・良いでしょ。」

では明日の婚儀後、すぐにゲートへ発ちなさい

冷たい表情でさう言ひ、もう用は済んだとばかりに早々と立ち
去る王。

対して、『ゲート』とこつ言葉を聞いて興奮気味に躍り出す貴族
達。

ゲートとは一壁下は妃を殺す氣かの？

確かあれば国境の地。戦争が起ころやもしれぬ地に妃を送る
とは・・

まあしかし、その気持ち、分からんでもないな。

そつそつ、相手がアレでは・・・神は何をもってアレを美女と
定めたのや。」

予想通りの展開にムギナは俯き、唇を噛み締める。

それを雪は見上げ、不思議そうに首を傾げた。

身体に残る傷や過度な怯え様から、彼女が辛い日々を送ってきた事は一目瞭然だった。当然満足に食事も取れず、こんなになるまで痩せ細ってしまったのだろう。孤児院で同じような子供をたくさん見てきたムギナは、しっかりとそれを理解していた。

しかし、陛下は・・常に完成形である美女しか見てこられなかつた。

ムギナは雪を連れ、広間を後にする。

おそらく将来、雪は必ず美女となるだろう。それは彼女が神運の子として選ばれた時点で決まっていた。

「それを知った時、陛下はどうするのだろう？」

ムギナと雪が扉を潜ると、壁際に立っていたシユリルが近付いて来る。

問う様な彼女の視線に、首を横に振るムギナ。シユリルは眉間に

皺を寄せたが、雪の視線を感じて微笑みに変える。

(・・いや、シユリルがそれを許はしないだろうな)

信頼出来る部下であり、日下求婚中の相手を見て、ムギナは苦い顔をする。

(「いつぞ、私も彼女達について行こうか）

楽しい思いつきに、ひつそりとムギナは笑った。

「おい、ディレイ。大丈夫か？」

王の執務室に着くなり、ディレイは倒れ込むように椅子へ腰掛けた。

部屋には一人しかいない為、マレーの口調は荒い。

「ああ・・問題ない」

「しつかし、あれが神運の子ねー。」
で、感じる物は何かあつたか？」

「悪い冗談だ。あの顔に？有り得ないな。
何だ？気になるのか？」

「うん、ちょっとなー」

「ならお前が相手すればいい。

俺が許可しよう

「神さんがお前にって選んだ者を、俺が？
それこそ神罰が下るさ」

ディレイの怒りは既に治まっていた。その事で彼は、自分の判断
が正しかったのだと分かる。

「ま、神に呪われようが何それようが、俺はお前に従うからな」

先程までは違つ、穏やかな笑みを浮かべるディレイ。

「しつかし俺は初めて見たぞ」

「・・・何をだ？」

ディレイの空色の目が不機嫌そうに細められる。

「お前があんなに激怒している所をだよ」

「一生の事だからな」

何だそんな事か、とディレイはため息を吐く。

「なあ、ディレイ」

「何だ」

「後悔、すんなよ」

何を偉やうこと笑つて返やうとしたディレイは、マレーの口を覗いて固まる。

「後悔すんなよ」

念を押す様に黒田は、思いのほか真剣だった。

「なんだ、いきなり」

「・・・・ちょっとな」

(怒るところ事は、関心があるという事。
本当に分かっているのか、ディレイ?)

予想もしない結果にマレーは戸惑っていた。

闇に包まれた部屋で、一人の女がベッドに横たわっている。

「ふふふ・・・それで？」

赤い液体の入ったグラスを手の中でクルリと回す。

彼女の背後には、男が数人立っていた。彼らは一様に、紅の服を着込んでいる。

「ゲートへと送るそうです」

「ふふっあははははは！――！」

突然の甲高い笑い声にも、男達は動じなかつた。

「馬鹿な人ね。本当に馬鹿な人。

神運の意味を分かつてない若造らしい判断だわ」

女はグラスを傾け、中の液体を全て飲み干す。

空になつたグラスは、彼女の手の内で粉々に砕け散つた。

「私も国へ帰ろうかしら？」

先を見誤ったこの国は、いずれ終わるわ。
悪いけど、私は捨て駒じゃないのよ」

「帰られますか？」

「ええ。

帰つて父上に申し上げなくちゃ」

「ラジオヌ国は終わりです、つて。

「ふふふ、楽しみ」

その夜、一台の馬車がラジオヌ国の城を発つ。

誰にも止められぬ事なく、じつと。

4 王様の判断（後書き）

年齢設定

雪 16歳

ムギナ 39歳

シユリル 38歳

5 ゲートへ

それは歴代で最も簡素な儀式であつたと後に語られる。

あらゆる女性が誰しも一度は夢に見る婚儀。

王の婚儀はいつも、豪華に盛大に行われてきた。

まず初めに神殿での神への婚姻宣言。続いて民の前での宣言、そして最後にお披露目という名のパレード。これが通例であった。

しかし、今代は違つた。

行われるのは、神殿での儀式のみ。貴族や民が見る事のない、閉めきつた部屋での儀式。

その異例の事態に最も戸惑つているのは、民達であつた。

パレードを見て感じる未来への安堵。それが無い。民達は揃つて不安を囁き合つた。

「「」の婚姻を一生のものと定め、神の名の元に生涯手を携えてゆくと誓うか」

「・・・・・・」

「誓います」

一人は黙つて首肯し、そしてもう一人は諦めた様にそう言い切つた。

一人のそんな様子を、儀式の進行役のムギナが心配そうに見つめる。同じようにして、警護の為に壁際に控えるマレーも一人を見守つている。

雪とディレイは共に、光沢のある群青色の式服を着ていた。

「では誓いの首輪を。

これを付けた瞬間に、一人は縛られる事になります。

約束を違えた時はその首を、この首輪が神の力によつて落とすでしょつ」

二人の神官が神殿に入つて来る。

神官達はディレイと雪の傍でそれぞれ立ち止まり、抱えていた金色の箱を二人に差し出す。

ディレイは、彼らが捧げ持つ箱から首輪を取り上げる。

首輪は小さな銀輪がいくつも連なつて出来ていた。宝石の類いは無いものの、その小さい銀輪の一つ一つに細かな模様が彫られてゐる。模様は神聖文字であり、婚姻に対する誓いの句だつた。

それを雪の首に付けるティレイの顔に、婚姻に対する歓喜の表情は一切ない。

雪もまた同様に、いつもの如く無表情だった。

「これをもつて、二人の婚姻を神に捧げん」

とても静かに、あくまでも冷たく儀式は終幕を迎えた。

群青は内に持つ光を瞬かせ、一人を見つめ続ける。

婚姻の儀が終わり、明けて朝早く。

城の前には一台の馬車があつた。その馬車には二頭の馬が繋がれ

ている。

「ムギナも共に行くのですか？」

ディレイの問いに、馬車を前にして和やかな表情でムギナは頷く。

「私は神の意に従います。

神がこの地に遣わされたあの方の成長を、私は見てみたいのです。

「そうですか」

シユリルと一緒に歩いて来た雪を見て、ムギナは微笑んだ。

彼らの立つ城門に優しく風が吹く。

ムギナは馬車の御者席に座り、馬車にはシユリルと雪が乗り込んだ。

三人共、村人が着る様な粗布の服を着ている。盜賊に狙われないようにする為、馬車も使い古されたものだった。

「では行つてまいります。

陛下、どうかお健やかに」

「ああ。達者で」

そんな短い言葉を最後に、馬車はゆるゆると出発した。

＊＊＊

まるで血が染み込んだかの様なダークレッド。

赤々とした壁面を持つその城は、周囲を威圧するようにして在つた。

城の謁見の場に、今一人の老齢の男が剣を片手に立っている。

彼の持つ剣からは、ぽたりぽたりと血が流れ落ち続けていた。

男が突然入口の方へと半身を捻る。

「ほお？ 一日にして二度も来るのは、えらい急いだものだな」

男の視線の先には、今までに部屋へと踏み入らうとする女の姿が

あつた。

男と女の間で、視線が交わされる。

「お久しぶりですわね、父上？」

あまりにも後宮暮らしが身に合わないものですから、帰ってきてしまいました」

「かなり気ままに過ぎ」といふ、と聞いていたが？」

「ええ、勿論それなりに樂しく。

・・そういう父上じゃ、つい先程まで遊んでいたのでしょうか？ソレで」

床に横たわる物言わぬ骸を指す女。

「嗜虐趣味は今も変わらぬようだ」

「ああ、コレは違つ。使えなくなつた駒だ。

・・・・で？

戻ってきたといふ事は何があるんだろう？」

男は剣を振つて血を落とし、鞘へと仕舞つ。その一連の動きは、剣に慣れている事を示していた。

「ラジエヌは盾を手放しましたわ

女の言葉にピクリと男が身体を揺らす。

「本当か？！」

その歳に似合わぬ、純粹な光が彼の目に宿る。子供のように無邪氣で無鉄砲で・・・しかしそれが故に恐ろしい。

「しばし機を待てば、確実にラジオヌは終わるか・・・
その歴史に似合わん、あつけない終焉だな。
何故手放した?」

「容姿の問題ですわ。」

王家一族の執念は、存在の重要性をも無視させる程に強い
「確かに、神運の子は必ず美を備えているのではないか?」

腑に落ちないといった表情で、王座への階段を上る男。

「今日は違つたのでしきう。
直接見た訳ではありませんが、闇に聞いた限りでは相当の醜さだ
つたとか・・・」

闇

それが指すものは、女の抱える間諜である。

王座に腰掛けた男が声を立てて笑う。

「面白い。一度見てみたいものだ」
「ええ、本当に」
「・・・一日の強行軍だったのだ。疲れただろう?
ゆるりと休め」

「はい、父上」

頭を下げ、女は赤い絨毯を畳に微笑した。

(父上が他人を労るなど・・・相當に興味をそそられてしまうよう
ですわね)

＊＊＊

「ユキ様」

王城を出発してからずつと、雪は外を眺め続いている。何か興味の引かれるものがあったのか、王都を出ても見続けている。

だが、それに対する喜びや怒りといった感情が雪には見られない。

同乗するシユリルは不安を覚え、雪の名を呼んだ。

（婚姻だってユキ様の意思関係なく進めてしまいましたし・・・。
きっと怒っておられるのでしょうか）

シユリルの声に身体をビクリと震わせ、雪は彼女の方へと上半身を捻った。

「婚姻の件を…怒つておられますか？」

「…」

恐る恐る問つても、ただ沈黙が返る。変色して腫れた瞼の所為で、田から感情を読むこともできない。

セーラー服、言つまでもなく、表情も無い。

シユリルはもどかしく思った。

(これ以上お聞きしても、きっと何も答へてはいけないのだわ)

シユリルはため息をついて諦め、雪の見つめていた窓に視線を送る。

「…これから向かうのは、ゲートという国境の街です。流石に城のあるラ・シヨンには及びませんが、それなりに活気のある街。それに…シーノ国との境に建つ皆こせ、きっと驚かれますわ」

シユリルが語る言葉を聞く雪。彼女は窓の外を見る。

道脇の青々とした木が、流れてゆく。

「あ、いい事を思い出しましたわ！」

「コキ様、これを見上げます」

突然の声にシユリルを見れば、何かを手に乗せてこじらへ差し出している。

彼女の手にあるのは腕輪。

丸い、親指の先ほどもある群青色の石が細い金の鎖に付いている。

(はじめに見た天井と同じ色の石・・)

「それは天躯石てんくせきという石ですわ。

神の愛した庭にしかない花の、花びらから零れる朝露が地に落ち、石になるのです」

じつと石を見つめる雪に、シユリルは説明する。

「宝石としての価値もありますけど、身を護る聖石として贈るのが普通でしょうか

そこで一度言葉を切り、そして真剣な顔でシユリルは雪を見る。

「ですから、コキ様に付けていて欲しいのです。

神に愛されるコキ様ならば、きっと聖石の加護も強力に違いないありません!」

力説するシユリルに、雪は首を傾げる。

「・・・おわるへ。」

鈴の音の様に可憐な声が聞こえた。

ショリルは、それが誰の声なのか一瞬分からなかつた。

「え、ええーお守りくださいます！
きつとーーー！」

（お父前を聞いて以来、ようやくお声を耳に・・・）

ショリルは涙を流しながら笑つ。

6 忘れられた妃

背の高い、上方だけに葉を繁らせたキノコ状の木。

それが森に生える木々の特徴である。

葉は日を遮り、昼でも森の中は薄暗い。

そんな木々の間を縫うようにして、一人の女が歩いていた。

黒色のワンピースの裾が膝で、ポニーテールにした黒髪が腰で揺れる。細い身体に乗る顔は小さく、現実感に乏しくなるほど美しい。枝の上を走る小動物を追いかける目は、澄んだ琥珀色をしていた。

彼女の胸元には銀の鎖が、左腕には大粒の天軀石を通した金の鎖がある。

「ユキーーっ！」

名前を呼ぶ声に、女が振り向く。その顔は完全な無表情でありながら、やはり美しい。

「ユキー！俺を置いて行っちゃダメだって、いつも言つてるでしょー？」

駆けて来た青年の顔は拗ねていた。

しかし、対する女は首を傾げるだけ。

そう、彼女こそ雪だった。

王城を去つてから早くも三年が経ち、雪は十九歳になっていた。

醜悪だと冷笑された容姿は影も形も無くなり、まさに神運の子といえるものへと変貌を遂げた。

その変化に対し、やはり時と共に変わらぬものもあった。『表情』と『言葉の少なさ』である。

「だーかーらー！
一人じゃ危険だつて言つてんの！
なんで分かんないかな・・・シユリルに怒られるのもうヤダか
らね！」

大剣を背負つて立つ青年が、頬を膨らませる。

彼の名はリゾン。

もつさりとした茶色の髪に、クルリとした赤目。顔だけ見れば、完全な女性だ。が、身体を覆う引き締まつた筋肉と長身が彼を男だと主張する。

「分かつたあ？怒られんの、俺なんだかんね！ああでも、やっぱ可愛いなあ・・・思わず許したくなるわーー

・・・中身は変態だが、一応雪の専属の護衛だつたりする。雪は一度誘拐されかけた事があり、それに危機感を抱いたムギナが雇つたのだ。雇われる前は傭兵だつたらしい。

腕は確かなのだろうが、変態性ゆえにシユリルからは随分と毛嫌いされているようだ。

「で？今日はドコ行くつもり？」

「また泉？」

泉。それが指すのは、森の中の大きな池である。澄み渡った水を求めて、森に住む多くの獣たちが立ち寄る場所でもある。

雪は首を縦に振った。

「そ、じゃあ俺もついてく

（仕事だから・・・）

一人で行きたい気持ちを抑え、雪は仕方なく頷いた。

「ホント、好きだよねえ。

俺からしたら、ただの泉なんだけど

（人じやないから、動物とか泉は好き）

「だいたい泉なんて、見るもんぢやないつて。どこの貴族だつての。あれは緊急時の水飲み場。もしくは洗濯場か水浴び場ー」

傭兵時代に何度か、泉でそつした経験があつたのだらつ。リゾンは雪の後ろを歩きながら話す。

(きれいなのにな・・・)

「・・・って、どうか、俺無視されてる?ー!」

しつかりと聞いて考へてはいるのだが、雪の心の声はリゾンには聞こえない。

二人の会話は常に一方通行だった。

嘆くリゾンを尻目に、雪は見えてきた泉に心中で歓喜する。

木々がいきなり途切れ、ひょうたん型の泉が広がる。澄んだ水は空を、木を写す。反対側の水際には四足動物が集つている。

(やつぱりこじは落ち着く)

空を流れる雲を見上げ、雪はゆつたりと流れの間に身を浸す。

せわしなく動く者の居ない、外界から隔絶されたこの空間が雪は好きだった。

現実逃避を開始した雪の横でリゾンは腰を降りす。

いつもは雪に話しかけてばかりいるリゾンも、この時は黙り込む。否、話しかけられないのだ。

うつとうと景色を眺める雪は、まるで泉に降り立つ妖精の様に美しかった。

(神秘的ってのは、たぶんコキの事を言つんだらなー)

普通の庶民なら氣にもとめない物に喜ぶ。リゾンはそんな主が案外好きだった。

そう、命を掛けて護る主と認めても良い程までに。

泉のほとりに立つ一人を、ほんわかとした空気が包んでいた。

「お帰りなさいませ」

「おひりに向かって歩いて来る雪を見つけ、シユリルは口元を緩めた。

彼女が立っているのは、木造の家の前。木の温もりが感じられる家だが、造り自体は庶民の家と変わらない。広間にしつら、少しだけ大きいかな?といつぶら。

王妃が住む物としては粗末すぎる家だが、これがムギナとシユリルの精一杯だった。

そもそも彼らは領主を田畠としない教会で働いていたのだ。貢献料といひ名の給料は、庶民の稼ぎを少し上回る程度しかなかつた。

本当ならば傭兵を雇う金もないのだが……そこはリゾンの好意で、衣食住の提供が彼の給料代わりとなつていた。

「今日も泉に?」

「くへりと頷く雪。それを見て、シユリルは笑みを深めた。

が、雪の背後に立つリゾンを見た途端、彼女の空気が凍る。

「今日はちやんと護衛してたって!なあ、ユキ?」

「嘘おつしゃい!途中から慌てて追いかけていたのを、私はこの田でしつかりと見ましたわっ!」

「うわー見られてたのかあ」

「ゴキ様がいらっしゃれでもしたら、どうなるおつもりですか？…」「いやいや、俺に気配を読ませず立ち去るゴキがダメなんだってー！」

「貴方とこ、人はつー自分の怠慢をゴキ様の所為にならぬと？…」

あー言えば、一囁ひ、終わらない恋酬に雪は小さく息を吐いた。
まだ言ご令ごを続ける一人を放つて、雪は戸口に立つて家のなかを見渡す。

(ムギナ・・いない)

雪は首を傾げた。

「じつしました、ゴキ様？」

ゆづやく言ご令ごを終えたのか、シユリルが雪に近づく。彼女の後ろでは、リゾンが荒い呼吸を繰り返している。

じつやう、肺活量ではシユリルに敵わなかつたらし。

「もしかしてムギナをお探しでしたか？」

再び首傾する雪。

「あの方なら今、おそらく孤児院におりますわ

何処かスッキリとした笑顔でシユリルが言つ。それを恨めしげに見つめるリゾン。

「孤児院は、親を失つた子供を育てる場所の事です。ユキ様が行きたいと願うのなら、ムギナが案内しますわ」

シュリルの言葉のほとんびが、雪の耳を素通りした。

(親がない・・)

親の居ない子供の気持ちが雪には分からなかつた。

(うれしい？・・・かなしい？)

三年前の記憶を掘り返してみる。

実の親に殺されそうになり、死が迫る間際に異なる世界へと飛ばされた雪。

シュリルに抱きしめられた時、何を思ったか？

(うれしい)

ようやく解放されるのだといふ雪びき、あの時確かに雪は感じていた。

(私と同じ、親のいない子)

それならば何か共感できるのではないか？

雪はシュリルを見上げる。

「行つてみたい」

白い木は、普通の茶色の木より価値が高い。これは一般常識として広く知られている。

その理由は様々で、『見た目がいい』とか『丈夫で耐久性がある』とかいった理由が一般的だ。

そんな木で、ならかな丘に建つ孤児院はできていた。

孤児院の周囲には草原が広がり、丘の下に広がるゲートの町並みを眺める事ができる。

ムギナに連れられ、雪がそこを訪れた時はちょうど雪だった。

「ムギナ様とお会いする前に一度、ここを訪れた事があるので」という姿が見えた。

「ムギナ様とお会いする前に一度、ここを訪れた事があるのでですよ」

微笑んで見つめるムギナの視線の先には、子供達がいる。

「その時はまだ、この場所に子供は一人も居ませんでした。先日来た時に子供の姿を初めて見て、感動しました。この孤児院はちゃんと必要とされているのだと・・思わず泣いてしまった」

口元に人差し指を立て、内緒ですよとムギナが言つ。

「昨日聞きそびれてしましましたが、何故ユキ様は孤児院に来たいと?」

「・・・知りたかった」

「孤児院を?」

首を横に振る雪。

「きもち」

「気持ち・・・ですか」

これまで雪は、泉に行く時以外で自主的に動く事がなかつた。

食事や着替えといった生活の基本ですら、放つて置くとやらなかつた。最初の頃にシユリルがよく絶叫していたのを、ムギナは今でも覚えている。

何故叫ぶのか分からぬといつた顔で立つ雪は、まるで赤子のようだつた。

(いつの間にか、成長されていたようだ)

雪が他人を気にしあじめた事が、ムギナは嬉しかつた。

「そうですか・・・では、話しかけてみるといいでしょ。人見知りの少ない子達ばかりです。
きっと、すぐに仲良くなれますよ」

笑みを深めるムギナを、不思議そうに雪は見上げた。

孤児院を玄関から出た女が、一人を見て声を上げるのが聞こえる。女は洗濯物を入れた籠を抱えていた。何故か慌てて一人へと駆け寄つてくる。

「む、ムギナ様っ！」

先日はすみませんした。何の用意もしておらず、十分な歓迎も出来ませんで」

「いえ、じづくじづく昨日急に来てしまつて、すまなかつたね」

くじくじと頭を下げる女を、ムギナは穏やかに止め。

そして、お辞儀を止めた女は雪の存在に気がつく。

「こ、こちらの方は？！」

もしや高貴な・・・？」

雪の顔立ちを見て、真っ青になる女。

「まあちよつと、お忍びでね。

ああ、そう緊張しなくともいい。

ユキ様はそんな御方ではない

雪は、木の棒で遊ぶ子供の様子をじっと見つめている。

「ユキ様、今日はリゾンはおりません。

ですから、絶対に私の見える範囲に居てくださいね

雪は頷き、ムギナ達から離れ、子供達の方へと向かう。

「あの・・・？」

「危険はないから安心しなさい。

少し・・そう、少しだけでいい。話をさせてあげて欲しい」

「の方のあの表情・・もしかしての方も?」

「すまないが、私も詳しい事は知らない。

あの通り、非常に無口な方だから」

ムギナと女は、雪を見つめる。ムギナは何処か嬉しげに、女は不安げに。

少し離れた場所でボーッと見つめる雪の姿に最初に気がついたのは、五歳ほどの少女だった。

「おねーちゃん、だあれ?」

二つの間にか隣に居た少女を見下ろし、雪は彼女と回じて首を傾げる。

少女は、ぱちくじとした翠の田に向いていた。肩ほどにある

茶髪を緑色のリボンで結い上げた彼女の姿は、とても愛らしかった。

一人して首を傾げ合ひつていると、少女の頭に誰かの手が乗つた。

「なーにじとんねや、ルリアア?」

手は、金茶色の髪の少年のものだった。

変な発音で話す少年は、紺色の田を雪に向ける。

「セツキムギナ様とおつた奴やんな?
綺麗な奴やなつて思つとつたんや。前は何や?」

牙のよつにも見えるハ重歯を見せて、少年は一カツと笑つ。

「雪」

「ユキか! よろしくな!
俺はザツキ、このちまいのはルリアアつーねん!」

「くづりと頷く雪。

「おねーちゃんつて、ムギナさまのジビモ?」
「おこ、ルリアア!」

雪は首を横に振つた。

「「」めん、悪い事聞いたな。

ルリアはまだここに来て日が浅いんや。許したつて。
・・でも親やないつて事は、新しく「」に入る子つて事か?」

またも雪は首を横に振る。

「・・・じゃあ何で「こんな所に?冷やかしありやせんなっ。」

ムツとした顔で聞くザッキに、雪は首を傾げた。

「聞きたいことがあった」

「・・・・何や?」

ルリアを背後にかばい、ザッキは雪を警戒する。

「うれしい?」

「何が?」

「親がいなくなつて」

(何句言つとねん、コイツ!...)

雪の言葉に、カツと頭に血が上つた。

「嬉しいわけないやろ?一お前、頭おかしいんじやうか?」

雪はザッキの背中から顔を出すルリアに視線を送る。

ザッキのただならぬ雰囲気を嗅ぎ取ったのか、琥珀色の目と目が合つなりビクリと身体を揺らす。

「・・うれしい?」

「「」のつ!いい加減にせえ!...」

バシッといつ音が辺りに響き渡つた。

手を振り下げた状態のまま、ザツキは田を怒りで歪ませる。

「俺らは好きで孤児になつたんやない！」

ここに住む奴らの中には、親を田の前で殺された奴やつておるんやつ！

うれしい訳あらへんやろ？！」

そこまで怒鳴つて、ザツキはやつと我に返る。

雪の表情や空気が恐ろしいまでに冷たくなつていたからだ。それまでは感情が見え隠れしていた目も、今や人形のよつだ。

片頬を赤く腫れさせた雪は、じりじりとザツキから後ずさる。彼女の足は田に見えて震えていた。

「ユキ様つ？！どうなさつたのです！」

「ザツキ！貴方何したの？」

そこに駆け込んでくるムギナと女。

一人は雪の頬を見て大体の事情を察したらしく。

女がザツキを責めるよつな田で見る。

「だ、だつてソイツがつ！？」

「だからつて何故手を出すの？」

女とザツキの言い合いで、ルリアが泣き出す。

ムギナは雪の前に跪き、彼女に必死で話しかける。

「ゴキ様？・・ゴキ様ー！」ひきを見てへださこー・ゴキ様！」

こくら呼びかけても、雪の田は虚空をや迷つだけ。

こいつのこと、肩を掴んで揺らしたかつたが、ムギナはそれが出来ないと知つてゐる。

「私の田を見て下さい、ゴキ様」

（私は貴女を傷つけない！）

「ゴキ様！ー！」

雪の田が僅かに動く。

（今だつ）

「ゴキ様！私の田をーー。」

わぬわぬと雪の顔が上がる。

ムギナの翠の田と雪の琥珀の田とが交差した。

瞬きと共に、雪の左目から涙が一滴じぽれ落ちる。

ムギナはそれに息を飲んだ。

「ユ・・キ・・・・様？」

「わからない」

「・・・・・何がですか？」

「ぜんぶ」

雪の顔が、いつもの無表情に戻つてゆく。

「ユキ様・・・」

「私には分からぬ」

これ以上何も聞きたくないと両耳を手で覆つ雪。

それは彼女の拒絶だった。

(また他人との間に壁を作つてしまわれるのか・・・)

草原にしゃがみ込む雪を見て、ムギナは悲しげに目を伏せる。

「・・・あの、ムギナ様」

「俺は絶対に謝らん」

「ザツキ！」

「だってソイツが悪いんや。無神経な事聞いてくるし」

雪から顔を背け、ザツキはぶつぶつと文句を言い続ける。

ムギナはザッキの前にしゃがんで、彼と視線を合わせた。

「明日またここに来た時、私に詳細を話してくれるかい？」

「いいですよね、ハミリイ？」

「え、ええ。勿論です、ムギナ様」

女はザッキの背に手をそえ、勢いよく頷く。

使い込まれた、しかしそうな黒いテーブルを囲つて四人は向かい合つ。

「そんな事をおっしゃったのですか・・・」

ムギナは眉間に深く皺を刻んだ。

「俺は絶対に謝らん」
「ザッキ。貴方は何て強情なの！
少しさは自分の行動を見直しなさい」

女 ハミワイが厳しい声を上げる。

ハミリイは元神官だった。神殿から孤児院へ派遣され、今ではゲートの孤児院の院長をしている。

歳を経たふくよかな身体、日々奮闘しているからだらう艶のない亞麻色の髪。いつも慈愛がこもっているはずの目は、今やつり上がりつている。

「だつて俺ホンマに悲しかつてん。
父さんと母さんが冷たくなつて・・それやのにーあんな事言われて腹立たん奴が何処におんねやー！」

ガソソとその小さな拳を叩きつけ、ザッキは唇を噛む。

「・・嬉しいとか、俺らと同じ状況になつた事ないから言えるんや

「ザッキおにーちゃん」

ハミロイヒザッキとの間に座るルリアが不安そうな声を上げた。

「・・・嬉しい、か。

嬉しいと思える事情が、ユキ様にはあつたのでしょうかね

「まあかつーー！」

ハミロイは口を両手で覆い、顔を青ざめさせる。

「少し考えれば分かる。

誰かが触れる事への過敏な反応。それに今回の言葉。おやじの口
キ様は・・・」

（なんという酷い事を・・・。

彼女に足りないのは言葉でも経験でもなかった。

彼女に必要なのは、愛だ）

ムギナは自分を嘲笑う。

（愛を『』える・・・私たち神官の最も得意とする事じゃないか。
そんな事にやえ気づけないと私は神官失格だな）

「どうこの事や~？」

押し黙るムギナとハミロイに苛立つ、ザッキの紺色の皿が組まる。

「怒る前にまず、貴方はユキ様の事を知らなければならぬ」

ムギナは苦笑を浮かべ、ザッキに答えた。

(ザッキだけではない・・・私も、何も知らない)

一年という時があつたのに、知りうとしなかつた自分。雪の心の壁を言い訳にして、一度も彼女に聞こうとしなかつた。

(これほど苦い気持ちになつたのは、いつ以来だらう?)

黒髪が風で舞い上がり、落ちる。

舞い上がり、落ちる。

座つて、それをボーッと見つめるリゾン。

これはいつも泉のほとりで繰り返される光景だ。

(なーにが起きてんのかねー?)

昨日、ムギナと共に帰ってきた雪。その時の彼女は、生死の境に

足を踏み入れた事のあるリゾンでむくびとあるほど無表情だった。

（朝からマギナは出かけちゃうしー。コキはコキですとあんな感じだしー）

見上げる空が紅に染まっている。来た時が朝だった事を思い、リゾンはため息を吐いた。

「・・・」

ずっと泉を眺め続けていた雪が、突然リゾンを振り返る。

「なあに?」

トコトコと定位置を離れ、首を傾げるリゾンの傍に雪は座つた。

「ねえ、何があつたの?」

問い合わせるリゾンを雪は見上げる。

何かの感情が雪の目をよぎつた。

「・・・うれしい?」

いつも無視される会話に慣れていた所為で、返事に困惑しながらも興奮するリゾン。

「何が?」「親がない」と

リゾンの中の興奮が、ピシッと固まった。

(平常心、平常心)

「何でやつと思ひの？」

雪は視線をそらし、泉を見つめる。

(あつやつや・・・)れは答えてくれそうにないねー)

リゾンも泉に顔を向けた。

「やつ思つたから」

予想もしないタイミングの答えに顔を向ければ、泉を見つめたままの雪がいた。

「思ったの？」

頷く雪。

「親つて、なに?」

「親、ねえ。」

無条件で子供を愛し守る者・・・つむづみづよねー

「愛つて、なに?」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・」

雪はリゾンの方へ皿を向ける。

リゾンの顔にこつもの悪戯つ子のよつたな表情はない、マキナと同じ穂やかさがある。

「ねえ、マキ。

俺の膝に座つてみない?」

(ふざけ・・・)

雪は首を傾げ、草の上で組まれてこむリゾンの足を見る。

(ふざけ・・・?)

座る自分を想像して、リゾンは背中を向けるのだと想こねる。

「怖い事なあんて何にもしなによ?」

ほりおこで、と膝を叩く。

(ひわこじと、しなこ)

ひわこと、頭の中に敵の姿が現れる。

皿を閉じて、その姿を心の奥へしまじ込む。

じりじっと何かを確かめるよひがへびへ。

急かす事もなく、膝を叩いてリゾンは待つ。

「おこで」

リゾンの膝に重みが掛かる。

風におおられた雪の黒髪が、リゾンの顔をくすぐった。

体と体とを密着せしめ雪の身体に腕が回され、引き寄せられる。ビクッと彼女が揺れた。

「どんな感じ?..」

(あつたかい・・)

「温かいでしょー」

雪の頭が動くのを感じて、リゾンは微笑む。

「ユーヤつて人に抱きしめられると、心が穏やかにならない?」

(おだやか?)

「時間の流れがゆっくり感じると、ずーっと、こんな時間が続ければいいのにーみたいな」

雪は、泉を見る。

いつも泉を見ている時は、思っているより早く時間が流れていた。

「たぶんそう感じた時を、幸せって言つたんじゃない？」

(しあわせ・・・)

「愛つて、たぶん幸せを知つてからじゃないと分からないよ。

・・・「キは今、幸せ？」

キラキラと太陽の光を反射して、泉の水面が輝く。

何度も見たいと足を運んでしまつ泉。

薄暗い森の木々の間を必死で歩いて、ようやく見える泉。

木々の隙間から泉が見えた時、雪はいつも・・・・・

「うれしいは、しあわせ？」

「とてもよく似てるよ。俺は哲学者じゃないから、詳しくは知らないけどね。

でも、喜びと幸せは同じって考へてもいいんじゃない？」

(うれしいは、しあわせ)

その瞬間、リゾンは息を飲む。

雪の顔が少しだけ和らいだのだ。

完全な笑顔とは到底呼べない。・・・が、それは確かに雪の成長と言えた。

「ユキは幸せ?」

「しあわせ」

「ならその内に気づくよ。愛つて」(いつも事なんだつて)

(家族なら、俺はたぶん優しいお兄ちゃんって奴だろうなあ)

リゾンは愛しさを感じていた。

8 孤児院へ後編へ（後書き）

シュリルがもし泉にいたら、リゾンの膝に座りついする雪をやつ
と全力で止めていたはず・・

(何故? 何故ですの! · · · ュキ様っ)

夕方、家の外で洗濯物を取り込んでいたシユリルは激怒した。

孤児院に行つてから様子がおかしくなつてしまつていた雪を、彼女はずつと気にかけていた。

だから朝、雪がリゾンを連れて泉へと向かおうとするのを、当然引き止めたかった。

実際にそれを行動に移さなかつたのは、あの場所が雪にとつて大切だと分かつっていたからだ。

(それなのにつ · · · あの野獣め!)

泉から帰つた雪は何があつたのか、リゾンと手を繋いで帰つてきた。

以前よりも柔らかい表情に安堵もしたが、それ以上にリゾンが憎かつた。

(一体何をどうしたら、気安くユキ様に触れるの!

私はまだ髪を梳く事さえ、させてもらつてないのに。
あんな事やこんな事、私だつてしたいわつ。不公平よ（

腰に巻いたエプロンをぐべつと握り締め、シユリルは居間でくつろぐリゾンを睨む。

（何よりも許せないのは、料理の準備をする私を差し置いて！

雇われ傭兵！）ときが！

ユキ様を膝に乗せている事よー（

まな板に転がる野菜を憎きリゾンに見立て、包丁を振り下ろすシユリル。

包丁はいつも以上の切れ味を發揮し、一振り毎にまな板に線を刻んでゆく。

（ふふふ・・覚えてなさい。

私を怒らせると怖いのよ？

こうなつたら・・今庶民家庭で流行つてゐるところアレの出番ね。雑巾の絞り汁入りのお茶とかいうアレよ（

不気味な笑い声を出しながら料理するシユリルの姿に、リゾンの背中が粟立つ。

家の中に薄い殺氣が満ちた頃、玄関で音がした。

台所から出たシユリルが玄関へ向かつ。

「お帰りなさいませ、ムギナ様」

「ただいま帰りました。

・・何度も聞いても、夫婦みたいでいいですよね。いつも本当にしつまうところのは、どうでしょ?」

「お、お断り致しますわ

田を泳がせて、対応するシユリル。

「満更でもなさそーー」

「じょ、冗談じゃないですわっ」

シユリルがむつりとした表情で台所へ戻つていく。

それをニヤニヤと笑つてリゾンは見つめる。

「素直にならないと損するよーー?」

「何を分かつた事を?」

「・・・とりあえずシユリルとリゾン、続きは外でしてくれないかな?

?」

「何で?」

「彼が、ユキ様と話したいらしくてね」

怪訝そうに片眉を上げ、リゾンとシユリルは玄関を見る。

ムギナが壁脇に寄れば、その後ろから金茶色の髪の少年が現れた。

一人の視線に気付き、少年は田を揺らがせる。

「だあれつかな？」

「孤児院で暮らしていくね、名はザックと言つんだ」

「ふうん」

リゾンは脣の片端を意地悪そつに上げ、雪を見る。

雪はリゾンに抱きついていた。手が白くなるほど強く、彼の服を掴んでいる。

(もしかして、ユキがおかしかった元凶かな?)

「これでも護衛だからね。

俺だけでも傍に居たいなー」

雪の頭を撫でる。

彼女は俯いたまま動かない。

「ユキ様が怪我をなさってはいけません。私もある方の意見に賛成です」

小刻みに震える雪を見て、シュリルが一も一もなくリゾンを援護する。

(怯えるユキ様を放つて出るなんて私には絶対できないし、したくもないわ)

「二人の気持ちは分かる。でも、これはユキ様とザッキの問題なんだよ。

それに、誰か居ては思い切った話など無理でしょう?」「それはそうですが・・もしユキ様に何かあつたら・・

シユリルは恨めしげにムギナを見上げる。

「君に嫌われる事になつても、譲るつもりはないよ」

ムギナの翠の皿とシユリルの紺の皿とが互いに見つめ合つた。

やがてシユリルの皿が逸らされる。

彼女は、リゾンの胸元へと顔を埋める雪に深々と腰を折つた。

「ユキ様・・申し訳ございません。

後ほど、如何様にも罰は承ります」

「えー何でそういうかなあ。俺残るー」

「雇われ傭兵」ときの意見を誰が聞くと?

さあ、ユキ様を解放して、貴方も外に出るので

ぎゅっと服を握る手を、雪は緩めた。

「何があつたら俺の名前、呼べる?」

額ぐ雪の頭を撫で、リゾン達は家を出た。

家から出た途端、リゾンは真剣な表情になる。

「何故急に意見を変えた？」

ユキが怖がつてゐる事は、あの震えようで分かるだら一

シユリルは彼の責める目を逸らすことなく受け止めた。

「私は、神官としてのムギナ様を信用していますわ」

(ムギナの考えは当たるってかあ？)

逆の結果が出たらビーすんだよ)

舌打ちをしたリゾンは、家に背を向け歩き出す。

「見回り行つてくる」

家中に氣まがい空気が流れる。外見のみすぼらしさからは考えられない程、内装は住みやすく整えられていた。

床に敷かれた絨毯。庶民にとっては憧れのソファー。

(やつぱりムギナ様つて言われるだけあるわな)

部屋を見回した後で、ザッキはよつやく雪を見る。

雪は、ソファの上で膝を抱え俯いていた。顔を上げて話つつ素振りなど全く感じられない。

(・・・べつー俺やつてお前と話したくなんかないわー)

ザッキは荒々しい足音を立てながら、雪の斜め右にあるソファへ向かう。そこに座ったザッキは、雪の頭部を睨みつけた。

「最初に言つとくわ。

俺はまだお前を許してなんかおりへん。

ムギナ様と院長に言われて来ただけや。勘違いすんな

雪は微動だにしない。

「…………」

「…………」

「・・・これはムギナ様に言われたから聞くんやけど、何あんな事言つた?」

「…………」

雪はやはり動かない。

一方通行な会話は続く。

「ぶ・・ぶつた事は謝るつ!でも、あれはホンマに酷い言葉やつた

「…」

「…………この?」

「?」

姿勢はそのまま、雪が座ぐ。

「死んで、うれしくないの?」

(またコイツ(っ)

怒りの衝動でソファーから立ち上がるザッキ。眉間に皺を寄せ、拳を握りしめる。

(殴りたい!・・・でもーの舞になるんはコメンや)

「くそっ」

悪態をつきながらではあるが、彼は再び腰を落とした。

「俺はっ・・俺はゲートで生まれ育ったんや。家族は両親と俺の三人。

裕福ではなかつたけど、めっちゃ楽しかつた。
でも前の王妃様が亡くなつてすぐ、隣のニシーノ国と戦争になつた」

頃垂れたザッキの紺の目が、濃く陰る。

「戦争の始まりは突然。密かに内側に入り込んでた敵兵が、街に火をつけたんや。

時間は真夜中。

俺は、焦げ臭さに気づいて飛び起きた。火から逃げようと外へでたら、そこに・・・っ！――

ぱたりと彼の目から涙が落ちる。

「父さんも、母さんも敵兵に・・・！」

滝のように流れる涙が頬を濡らす。

「それでっ」

そう言つた瞬間、突然ザッキの頭に重みが掛かる。

見上げれば、雪がザッキの頭を撫でている。

「ぐずつ・・何じとんねん」

雪は無表情のまま、首を傾げる。よしよしと動く手は止まらない。

「手、何じとんねん」

「・・よかつたね」

「何がやつーまた親が死んでとか言つつもりか?」

雪は首を横に振る。

「生きてて」

「良くないわ!」

「こんな・・・こんな思いする位ならこいつそ・・・・・」

「もえたかつた?」

「んな訳あらへんやろー。」

「じゃあ、良かつたね」

ザツキは言葉を失う。

(ひじい言葉や・・・でも、ホンマの事)

人間誰しも自分を中心に考える。

それは、卑しい人間の本能。

(あの時死んでしまえば良かつたと思つ。・・・でも、やっぱり死ぬのは怖い)

ゆづくづくと優しく撫でられる。

「死ぬのは怖いんや・・・

鼻をすすつて、弱々しく囁く。

「生きて、うれしい?」

「・・・微妙」

「今しあわせ?」

ザツキはリアラを思い浮かべる。

「義妹も出来たし、そこは文句ないわ

笑う彼の目から、再び涙が流れた。

9 戦禍（後書き）

遅くなり、申し訳ありません。

謝罪と言い訳は活動報告にて。
宜しければ、ご覧下さいませ。

10 夢が見せる幻（前書き）

納得がいってません・・・
後ほど編集する予定です。

10 夢が見せる幻

首を傾げながら、手の平を眺める。

(なんで)

わざわざあつたはずの恐怖が、いつの間にか無くなっていた。

(・・・・・敵)

殴られたのだから、少なくとも味方ではない。

(なんで?)

撫でたのは、何故?

「おい、何ぼやつとじとんねん」

ソファーに座ったザッキが雪を見上げる。泣いた所為か、目が赤く潤んでいた。

「俺の事は分かったやろ。だから、次はお前の番」

雪の瞳がゆらりと揺れる。

「俺にとつての両親は、帰る場所やった。

・・・お前にとつて、親はどういう存在や?」

嘘は許さないとザツキが見る。

(親・・・)

『哀れな子』

敵の言葉が雪の脳裏に甦る。

忘れかけてた声が雪の感情を凍らせていく。

あの時あの言葉で、愛してくれるかもしれないといつ希望が彼女の中から消えた。

『哀れな子。』

子が必ず親を愛すと思ったら大間違いよ。だって・・・ほひ

息も絶え絶えに床へ伏せ寝る雪。その首に女は緩く両手をかけて

いた。

手の冷たさに、雪は弱々しく震える。薄田を開けば、女が薄い笑みを浮かべていた。

輝く黒髪の、むだ昔は美しかつただうつと想像できる顔の女。

『「こなにも音らしニ』

「あ、あああ・・あ・・・」

「おいー!おいつてーー!」

「ユキつ、一体どうしたんやー!」

耳を塞いでしゃがんだかと思えば、雪は突然苦しみ出した。田は見開き、顔色は真つ青に。唇は既に紫色だ。

驚き駆け寄ったザシキは、対処法も分からずあたふたする。

「おこー・ユキーー!」

バタンッ

玄関の扉が勢よく開く。

「何か物音がしましたわ!・・・・つてユキ様?ー!」

シユリルが慌ただしく走る。

「あ・・ああ・・・あ・・」

雪を見た彼女の目から涙が落ちてゆく。

「ユキ様あー」

耳障りな音が途切れることなく響いていた。

(・・・ひめこ)

* * *

田を開じたまま、雪は両手で耳を塞ぐ。

『冷蔵庫を開けるなんて！

ここにあるのは私の食事の材料なんだ！

お前にやる物なんて無いつ』

(うぬれこ)

『新しい服だつて？！

何で私が用意してあげなくちゃいけないの。

学校に行かせてやつてるつてこのに、本当に強欲な子』

『まるで凶魔じゃないの！

ホント、お似合い』

『死ねば？』

「うぬれこ」

叫んで雪は我に返る。

田を開けば、暗闇が広がつていた。

(・・・・ビリエ・)

奥行きの分からぬ暗闇に、不安と安堵を抱く。

一つの矛盾した感情は雪の身体を動かし始めた。

何かに導かれるよつ、ふりふりと闇を逃げ。

『知ってる？義務教育は中学までなのよ。
だから、お前は今日から私の奴隸をなさい』

一歩一歩踏み出す度に、左右から声が響く。

『ふふっ。笑える格好だわ。

学校でイジメられてるでしょうね？』

『あれを見なさい。お前はまだマシでしょ？
世界にはみんな困ってる子がいるんだから』

雪の田からは涙が流れていた。

(こあわせだった・・敵と暮らしていた時よりずっと)

元の世界での日々を強こじめば強こじめ、田から滴が落ちる。

ムギナ達との生活で感じた幸福を、雪は今まで実感していた。

『私が手を下さない殺せる方法は無いからへ

罵倒され、殴られる事の無い日々。

満腹になるまで食べられる日々。

清潔で届続けられる日々。

「私は・・・しあわせ」

『お前みたいな子が幸せになれるなんて思わないことね。母親である私でさえ捨てるのに。お前に価値なんてない』

ズキンと胸が痛んだ。

(また捨てられたら・・・私は・・・)

またズキンと胸が痛む。

「雪、それ以上考えてはいけない」

声と共に突然、目に閃光が突き刺さる。

闇に慣れた目にそれは厳しく、雪は目が開けられない。

「雪」

穏やかな、男の声が耳にまで届く。ビックリとする声だった。

(まぶしい・・・)

「雪、不安なら私の所へおいで。

今はまだ会えないけど、その内迎えに行くから」

「だれ?」

「迎えに行く。必ず行く。
大切で愛しい私の娘」

(む、す・・・め・・・?)

雪の身体が恐怖で固まる。

(また・・・・敵?)

「敵ではないよ、雪。

予想はしていけど・・やつぱり覚えてないか」

僅かに沈んだ声になる。

「それに彼女も、望んでああなつた訳ではないんだ。
彼女は狂つてしまつたんだ。私と引き裂かれてしまつたから」

(かのじょ?)

「里枝^{りえ}、雪の母親の事だ。
知つてるだろ?」

田を開けるが、光の中にぼんやりと黒い影がある事しか分からな
い。

「お父さんって呼んで欲しいな
「・・・・・」

(何で今になつて)

雪の中で、整理のつかられない感情が渦巻く。

「呼んでは・・貰えない、か。
でも必ず迎えに行くよ

遠ざかり、見えなくなる光。

都合の良い夢。

その一瞬で覚めた。

証拠に、父親だという男の顔は見えなかつた。

(ゆめ・・)

『何故早くこいつになかったのかしら?

・・・ああ、でも苦しんでくれたなら意味はあつたわ。ふふつ』

再び舞い戻る雑音を振り払うために、雪は意識を沈めた。

* * *

リゾンが首を軽く打ち、雪は気を失った。

彼女を運び込んだベッドの横には、シュリルが張り付いている。

「シユリル。貴女まだ食事を取つてないでしょ？」

「・・・」

「シユリル」

扉に立つムギナに背を向け、シュリルは雪を見続ける。

「やはり、付いていいべきでした」

「・・・シユリル」

「付いていれば、こんな事になつ」

仰向けに横たわる雪の顔は青白い。

シュリルはそつと彼女の頭に手を伸ばす。

雪は気づいてないだろうが、毎晩こうして触っていた。いつか目

覚めている時に触れる事を信じて。

「私は母親になれると思ってたんだわ。
なれるはずもないのに」

自嘲気味に微笑むシュリル。

「・・・とすると、私は父親ですか」「は？」

シュリルはムギナの方へ半身を捻る。

「いやあ、てつきりフラれたのだとばかり。
考えていてくれたんですね」

「ち、違いますわ！」

「美しい妻と娘を持って私は幸せです」

キラキラと眩しい笑みをムギナは浮かべる。

それを見て、さらにはシュリルは慌てる。

「勘違いです！
大体何でそういうの？」「ふーん。無意識、ね？」「ですから！」

もぞりとシュリルの背後で音がする。

「あ・・・」

恐る恐る見れば、雪が不思議そつな田をしていた。

ぽわっとシュリルの顔が赤くなる。

「ななな何でもないんです！」

母親になりたいとか父親とか、全く関係ありませんからっ！」

慌てていたシュリルは、雪の田が一瞬陰るのを見落としてしまった。

一つ息をつき、心を落ち着かせるシュリル。

「ユキ様、夕飯はいかが致しましょ~?~」

11 じまだち（前書き）

短めですが、この話にて雪編終了。
次の王都編の前に修正します。
詳しくは活動報告にて

11 ともだち

皿に乗った野菜をフォークに刺す。

ぱくりと口に含めば、野菜特有の甘味と僅かな苦味とが広がる。

そして新たな野菜を突き刺し、もぐもぐ。

刺して、もぐもぐ。

刺して、もぐもぐ…

口を動かしながら、雪は皿から視線を上げる。

「すっげー幸せオーラ出して食べるんやな」

紺色の目がテーブルの向かい側で呆れている。

(?)

口を動かしながら、雪は首を傾げた。

「泊まる許可はムギナ様にもうた。

まだ質問の答えも聞いとらんし、泊まらせてもうつたんや

フォークを持つ雪の手が止まる。

雪の背後にあるソファーでは、大人達が小声で話している。

話の合間に時々向けられる心配そうな視線が、彼らの本音を物語つていた。

「・・・敵

「てき？」

脈絡のない言葉を上手く漢字に変換できないザッキ。

「聞きたかったんでしょ？」

大人達の話し声が途絶える。聞き耳を立てているのだろう。

痛い位の沈黙。

雪は、皿の上の野菜をフォークで転がした。

「・・・テキって、敵味方の敵？」

頷く雪に、ザッキが困惑した表情を見せる。

「なんでも」

「殺されるか逃げきれるか、それだけ」

雪の抑揚のない声が、冷たく響く。

いつかの時のように、感情の完全に抜け落ちた顔が現れる。

「なんでこりの?つて

「?」

「まだ死なないの?つて

「おい?」

「どうしてまだ生きてるの?つて

「おいつ!..」

「早く死んだ方が楽でしょつて

「もう分かつたから!

それ以上言わんでもええつ

青ざめた顔のザッキ。

雪は彼を見て首を傾げる。

「私は何で生きてるの?」

その一つにない饒舌さが、言われた回数を容易に想像させた。

聞いていたのだろう大人達の方から、はりつめた空気が流れてくれる。

(ああ・・きつと「ライシは親に愛情をもらわれへんかったんや

ザッキはよひやく理解した。

そして・・

他人に、生きていて良かつたと言えるの?」

他人の涙を止める方法を知っているのに。

なのに。

それをした本人が、される事を知らない。

(悲しい奴や)

見えないけれど、おそらく彼女は心の中で今も涙を流しているに違いない。

(俺は・・こんな奴を叩いてしもたんか)

後悔と自己嫌悪で押し潰されそうになる。

チラリと向かい側を見れば、雪が何事も無かつたかのように食事に戻っていた。

「「めんなさい。本当に」「めんなさい」

勢いよく頭を下げるザッキ。

雪は口をもじりながら見る。

「ぐんと飲み込んだ後、首を傾げた。

「なに？」

「何も聞かずに決めつけて。叩いて、『ごめんなさい』

頭頂部を見せせるザッキに雪は首を横に振る。

「なれてる」

「何も聞かれないのも。

叩かれるのも。

雪の言葉は、彼の心を余計にえぐった。

(何か俺に出来ること・・・つ！

俺に出来る」とは何いんか？！…)

「なあ

空になつた皿を前にして、雪はザッキを見た。

「友達になつてくれんか？」

「ともだち？」

「うん。アカンか？」

「・・・・・」

ザッキは怒られた犬の様にしょんぼりとして待つ。

一方、雪は聞き慣れない言葉に首を傾げた。

(ともだち・・向ひの学校で聞いたような)

入学式などに生徒達が言っていたのを何度も聞いた気がする。

(・・・ともだちって何だっけ?)

あまりにも使う機会から離れすぎた所為で、必要のないものだと忘れてしまっていた。

確かに友達にならーとかいう使い方をしたはず。

悩む雪。

断られるかも、と戦々恐々するザッキの存在は脳裏から完全に消えていた。

(そのあと何て言つてたっけ?

ああ、あれだったかな・・・)

「なかよくしてね?」

思わず口から零れた。

返事と勘違いしたザッキの顔が喜色満ちる。

「ホンマかっ?!」

初めて会った時に見せたキラキラした笑顔。

(・・・・・いつか)

訂正するべきか迷つたが、相手の顔でビリビリでもよくなれる。

意味は分からぬにしろ、悪い言葉ではないに違いない。

雪は、ぽかぽかとする心を楽しんだ。

(ともだち)

『お前みたいな子が幸せになれるなんて思わないことね』

心のどこかで響いた声をふさいで。

次の日の朝。

黒髪をなびかせ、雪は泉へと向かう。

後ひから足音が聞こえない。

じつやうこゾンに気づかれずにしてしまつたらしい。

しかし、構わず雪は歩き続ける。

朝日が木々の間から漏れ、朝露の付いた葉が煌めく。

こつもより縁が鮮やかに見えるこの時間が、雪は好きだった。

しづらへ歩けば、大好きな泉に着く。

(あ、じつぶつ)

対岸に、鹿に似た動物の親子が水を飲みに来ていた。

少し得した気分になる雪。

まるで友達の出来た彼女を祝福してくれているような。そんな気持ちだった。

心地好い朝日のも、唐突に今までと違つたことをしてみたくなつた。

雪は水際にそつて足を踏み出す。

(リゾン、シュリル、ムギナ、ザッキ)

心の中で唱えれば、知らず知らずの内に口の端が上がった。

柔らかく微笑む少女を、言葉無き者達だけが見ていた。

「ああ、今日せどりやったつたようだね？」

背後から聞こえた声に、雪は足を止める。

(ひみつのじ)

自分と限られた者だけが知る場所。

女の人の声にそれが失くなつたと知る。

拗ねた そつは見えない無表情のまま、雪は振り返る。

最初に田に飛び込むのは、鮮烈な紅。

「こんじは？ 可愛らしい、お嬢ちゃん」

ナイスバディなお姉さんがそこにいた。

12 王達の記憶（前書き）

R指定に引っ掛かるものがあつましたら、『一報下さい。』

時は少々遡る。

「陸ト・・・」

暗闇の中、もう一つ皿の前の白シートが動くのを見た。

氣怠げに起き上がる美貌の王、ディレイ。

「どうした

「今宵も呪えないのか?」

「いらん。気が乗らない」

「そう言つて続けてもう一年が経つてるだ。

溜め込むのは身体に毒だ

女を傍にとめ、ディレイは深いため息を吐く。

「何度も言つている。いらん。

居ても邪魔なだけだ

じつとい、ハエを追ひながら手を動かす。

「・・・外にいるから、欲しけりたから、欲を動かす。

扉の閉まる音にマレーが出て行つたと知る。

(一晩中外に居るつもりか。迷惑な)

もう一度ディレイはため息を吐いた。

(しかし・・女に興味が湧かなくなるとは。
あれは本当の事だつたのか)

今は亡き父を思い、ディレイは眉間に皺を寄せる。

それをディレイが聞いたのは、十一の成人の儀の後だった。

「ようやくお前も大人か」

部屋に入るなり言われた言葉。

愛する妻を亡くし、一気に老け込んだ男がそこにいた。

王妃が生きていた頃に讃えられた美しさはもう無い。

彼もまた歴代の王達と同じく、伴侶の死と間を置かずこの世を去るのだろう。

(でも今日は少し調子が良さそうだな)

彼の持つ色を濃く受け継ぐ少年は、嬉しそうに笑った。

椅子に座る男の手招きに応じて、少年が彼の傍に跪く。

(父上・・・無理して大丈夫だろうか?)

不安が胸を過ぎり、少年は眉をハの字にする。

「何だ、私の心配か?
心配しなくとも、まだ死なんよ」

ほとんど灰色に近い青の目がティレイを見つめていた。

「私の命が消える前に、お前に話をなけばいけない事がある」「俺を呼んだのはそれが理由ですか。

人払いまでして・・一体何です？」

「今から話す事は、王族の口伝によつてのみ自分の子孫へと受け継がれてきた。

・・・誰もが知る五代目の、悲劇の真実だ」

「五代目・・王妃を手に掛けた王」

女狂いは初代から変わらず続く悪習慣。

それを抑える事のできる唯一の存在・・・神運の子がそれだと
いう事は誰でも知つていて。

122

「うむ。確かに五代目は浮気に嫉妬して手に掛けた。
しかし、だからこそ制約が増えてしまった」

「制約？」

「私達子孫は神運の子に出会つたと同時にその身」と囚われの

「どういう・・？」

「生きていけなくなる。ただそれだけだ。
私達にとつて彼女達は原動力であり命。
彼女達がいなくては子もできなくなつてしまつた

口が渴く。

ありえない話だと理性が叫んでいる。

「まさか・・・

「いざれ分かる。

お前がいざれ王となつた時とかにな

灰色の目を閉じ、男は疲れたように椅子の背に身を預けた。

「これまでの王達の全てを知りたければ、王錠の箱を開けるとい。鍵は死の間際に渡そう」

「王錠の箱・・・伝説では無かつたのですか」

王族の秘密。

その全ての文書を一つの箱に入れ、王自ら鍵番をしている そんな有りがちな伝説がまことしやかに囁かれていた。

啞然とするディレイ。

「知られてはならぬ。

ただ一人の女が、我らの最大の弱点だと。

悟られてはならぬ。

秘密がある事 자체を」

そうして我らは王族たりえるのだ。

男はそう締めくくつた。

＊＊＊

朝日が空を赤く染める頃。

ディレイは寝室と執務室をつなぐ扉を跨いだ。

大量の紙が積まれた机を回り込み、椅子に深く腰掛ける。

「神運の子、か・・・。

何がこの世にあらざる美女だつて?」

あの醜い顔。

思い出す度に黒い感情が湧き上がってくる。

「せめて平凡でさえあればマシなものをつけ

ムツツリとした顔で、ティレイは右腕の袖をまくる。手首から肘にかけての黒い入れ墨が現れた。くねくねとした形は神聖文字の一宇だ。

意味は、鍵。

(できる事なら一生見たくなどなかつた)

執務机の一番下の引き出しに、入れ墨を触れさせる。

ガチャリと音が鳴つた。

引けば、中には重く古めかしい箱が入っている。表面に白く広がるのは埃だろうか。

「玉錠の箱・・・」

王という呼称が付くにはあまりにも地味な、何の変哲もない黒茶色の箱。

ティレイは、それを一度も開けた事がない。

「本当に開くのか？」

しばし躊躇うが、やがて決心したのか右腕を近づける。

ガコン、と重厚な音が箱を震わせた。

今にも壊れてしまいそうな蓋をゆっくりと持ち上げる。

(・・・・・巻紙?)

黄ばんだ、今では見かけない巻紙。

幾重にも巻かれた紙を広げてみれば、少しにじんだ文字が現れる。

「(リ)に代々の王妃を記す」

始めにはそう書かれてあつた。

「一代田国王妃、白く透き通つた肌に金の髪。
目は翠に輝き、こぼれ落ちそつなほど大きい。これほどの美しさ
は見たことがない。

身長はこの国の女性とあまり変わりはない。本人によれば齡は一
5だとか」

一代田から流して見ていく。

先代達は競う様にして、自分達の妻を褒めちぎつてゐる。その分
量は代を追つ毎に多くなつっていた。

「ただの惚氣かよ」

不愉快極まりないとこつよつテイレイの眉間に皺が寄った。

紙を巻き返し、五代田まで読み飛ばす。

「五代田國王妃、琥珀色の滑らかな肌にフワフワと揺れる黒髪。底の見えぬ黒目が誰の視線をも奪われる。山と谷のように優美な曲線を描く身体は、素晴らしい包容力を持つ。ああ・・素晴らしい」

文を見る限りでは、五代田もそれまでの王と変わりなく妻を溺愛していたようだった。

文はそれ以降も長々と続く。

が、途中であるで嵐にでもあったかのよつて字が揺れる。

『騙された！ 騙されたのだ！
愛しているだと？！ 何をだ！
許せない！ 許せるものか？！ ・・・ 殺してやるー。
相手の男もひとも殺してやるー。』

(記録とこつよつ、王の心の田記だな)

五代田國王の最後の筆跡をなぞり、ティレイは深くため息を吐く。

相当の怨みをこめたのだわ。文字は紙に刻まれるよつとしてあつた。

紙の上を彷徨っていた、ティレイの指が先へと動く。

「六代田国王妃、黒田黒髪。髪は長く、引きずる程。肌は黄色味を
帯びた白。素晴らしい容姿だ。何よりピンク色の唇が情欲をそそる。
ただ、私が国王につくにあたつて神のお告げがあった……。
これがっ！」

ティレイの表情が喜色ばむ。

続けて文字を追う。

「宝石は全てを虜にする。
心、身体、命、全てを繫ぐものなり」

「どうやら宝石とは神運の子を出すようだ。

その後はお告げに対する国王の考察と実体験が続く。

ティレイはそれを読み終えると、静かに目を閉じた。

彼の眉間にほぐつきつと皺が寄っている。

「そうか……神はそれ程までに……」

胸元の首輪を探り、ちぎれんばかりに握りしめる。

「……これは枷だ。

私たち王への枷だつたんだ

上げられた臉から覗く青田には苦惱が、口には血潮の笑みが浮かぶ。

「手に掛けさせず良かつたと言つべきか」

脳裏には古くして將軍の座についた幼馴染の姿があった。

「せめて平凡であれば・・・」

幾度となく口にした言葉を今日も繰り返す。

12 王達の記憶（後書き）

もの凄い勢いで書き上げたので、ミスがあるかもしれないです・・・。

わざと確認は致しましたが、もしあれば罵倒して下下さい。
後々修正します。

13 欠ける者たち

ディレイは再び紙を巻き戻し、父であつた先王の記録に進んだ。

(父上・・・)

数度しか見たことのない父の筆跡。

確かに彼の人が生きていたという証拠を前に、思わず読む声が震える。

「一十八代目国王妃、透ける様な金の髪と薄茶の瞳を持つ。甘い香りのする白い肌はなめらかでみずみずしい。伝承通りの美女に相違ない。しかし性について開放的な考えを持つていたらしく、その身に既に純潔は無かった。忌ま忌ましい。

・・・母上は、父上が初めてでは無かつたのか」

記憶に残る母を思い浮かべ、ディレイは苦笑をこぼす。

(・・いや。あの美しさでは、仕方のない事だつたのかもな)

今はゲートに面するであろう、神運の子を思い浮かべる。

(外見がアレの様でなかつただけ、マシといつものだ。でしう、父上?)

ディレイは机の端に転がる筆を手にとる。

そして白紙の部分に狙いを定め、筆を走らせ始めた。

『一十九代田国王妃、髪は漆黒で艶は眞無。田也』

そこまで書いて、自然と彼の手が止まった。

(田は・・・見ていない)

重く垂れ下がつた紫色の両瞼で見えなかつた。

しばし考えた後、ディレイは再び手を動かす。

『田はおそらく黒か茶。』

(今までの記録に他の色は無かつたんだ。

黒髪といえば黒か茶。せつとどちらがだらう。)

『顔は、寝台を共にするなど考えもつかないほど醜い。紫色の瞼はどうやらも腫れ下がり、頬は瘦け、見てはいけないが身体も貧相なのだ。だからか、愛など感じなかつた。愛など感じる前に、憎悪が湧いた』

無意識にも筆を持つ手に力が入る。

力をいれ過ぎて震える手に従い、文字も僅かに揺れ動く。

(五代目の気持ちが少し分かるな・・・)

『私はあんな女を寄越した神が憎い。だから運を捨てた。女をゲートへ押しやつた』

ディレイの目が中身のない王錠の箱へと向けられた。

『しかし、どうやら私の反抗もここまでの一様だ。神運の子と王とに関わる秘密を悟られない為には、あの女が必要となる。後継者を作れる器を持つあの女が』

(・・・だが俺は憎み続けよう。
あの顔、あの身体を心底憎み、心に壁^を)

筆を置いた手を握りしめ、ディレイは青田を宙に漂わす。

面白くない未来が見えているのだろうか、目は険惡な光で満ちていた。

「愛はない。

王妃は道具だ」

昨日の未処理の書類をチラリと見、ディレイは冷たく笑った。

「ちょうど良い機会だ。

アレを片付ける為にも、一度ゲートへ行くか」

「ちょうど良い機会だ。

アレを片付ける為にも、一度ゲートへ行くか」

* * *

「父上、進軍の準備が整いました」

赤い絨毯に跪くドレス姿の女。

その向かいに立つ老齢の男は子供のよつて笑つ。

「ははっ、そうかそうか

どうやら男の機嫌は良いらしい。・・・むしり良すぎて、殺人衝動が抑えられなくなつたようだ。

絨毯の上に転がる身体は、その『遊び』の犠牲者なのだろう。

飽いた遊び道具を男は踏み越える。

歩き出した彼の後に女が続いた。

「父上、神運の子はどうなれるおつもりで？」

「どうでもよい。捨て置け」

「・・・不要でしたら、私にへぐださこませ」

男は笑みを引っこめる。

「欲しいか」

「ええ。非常に興味がありますの」

「なら、やる。研究結果は還元しや」

「もちろん」

女は狂気に染まつた目を細め、笑った。

それは男との血縁を十一分に感じさせるものだった。

「我らニシーノ国が神を得る。

お前も例の娘が欲しければ、それに協力しろ」

「・・・ええ、父上の御望みのままに私は死くしましょ」

二人が歩き着いた先は広いテラス。

城の高い位置にあるテラスからは城門・城下が一望できる。

今、彼らの眼下にある城門前には、兵士達がアリの様にひし

めきあつていていた。

兵士達は一一シーノの國色でもある紅の戦裝備を身に纏つ。

ひらりと風に舞つマントの裏は黒。赤い表には黒糸で壺が刺繡されていた。

その壺は、狂氣と享樂の神・リロイの一一つある神具の内の一つを模している。

テラスに立つ王族の姿に気つき、兵士達の間に張り詰めた沈黙が流れ。

眼下を見渡し、王は口を開く。

「長い間、一一シーノ國は苦しんできた。

・・・こや、苦しまれてきたのだ。あのリロイ神」

まるで独り言の如く紡がれた声に、兵士は聴き入る。

「神が何を思つて我らとラジエヌを分けたか知れぬ。

だが、我らの奥底で燃る狂氣は、今もラジエヌを一心に求めてい

る。

お前たちの中にも妻を悦ばせる事が出来ぬままに、その身の狂氣によつて死に倒らしめた者もおり

「

やつだ！ やら辛かつた！ やら、 声が上がる。

テラスに立つ男は片手を上げ、 それらを遮つた。

「 しかしそれも近く終わる！
ラジエヌは自らその守り手を手放した！
今こそ我らに狂氣と享楽の均衡を！」

『 狂氣と享楽を』 といつ唱和と共に兵士が行進を始める。
自分達の勝利を信じて。

狂氣と享楽。

愛の中にあるが、 裏に隠れて見えにくソレ。

普通なら両方持つはずが、 ニシーノ国民とラジエヌ国民は違つていた。

どちらの国民も、 どちらかが欠けていた。

欠けている事に薄々気付いてはいるが現状に満足するラジエヌに対し、 ニシーノは必死に片割れを求めていた。

愛したい。大事にしたい、と願つてゐるのに、狂氣がそれを壊してしまつ。

「どちらにもならない狂氣に長年苦しみ続けた二シーノ国民達はもう限界だつた。

求めるは享樂を持つラジエヌ。

享樂さえあれば、享樂を持つ血を得さえすれば・・・

「お前の母親もこれで救われよう」

テラスに立つ男の言葉に、女は目を見開く。

「あら? 愛しておられたのですか。

てつくり父上には狂氣しかないものと思つておりましたわ」

「・・知つておる。王族の血に流れる狂氣は、民の比ではない。私の唯一の子であるお前をラジエヌに送つたのも、それがあつたからだ」

「私も愛されていたとは・・・知りませんでしたわ」

クスクスと笑う女を、黒々とした目で見る男。

「ああ、愛しているわ。

それ故にいつ殺すかも分からんがな」

「私も父上を愛しておりますわ。

いつ王座を奪い取るとも知れませぬが」

どつちもどつちだ。男と女は似たような顔で狂った笑みを浮かべた。

赤い髪がふわりふわり。笑いあう二人を囲み揺れていた。

14 暗躍（前書き）

イマイチ・・・修正候補に認定。

「しかし、そう簡単に神運の子が我らの元に来るか?」

黒馬の上で揺られながら、ニシーノ国王が呟く。

「来ますわ。

特別上等な撒き餌を送りましたもの」

「・・・撒き餌? それはまた物騒な

へへへへと笑いつ男を、並んだ馬の上から見上げる女。

「物騒?

立派な戦略とおっしゃつて下さいな」

「フンッ。小賢しいことを言つ。

で、その撒き餌が裏切る確率は

「ゼロですわ

えりへ自信満々じゃないか。王は楽しそうに笑った。

「幸い国境まで時間はたっぷりある。

企みとやうの詳細を聞くつもりはないが

* * *

垂れ下がるソレを見て、ぱちくつと琥珀の皿が瞬く。

「こやー？」

首を傾げた雪に微笑む、理想的な肢体を持つ女。

青空の下、一人は泉の岸辺に座っていた。

女が着ているのは、鮮やかな赤いワンピース。

つゝすじと縁の混じった金色の長髪にそれは良く映えていた。

女の黄緑の皿が瞬きをする

「ニゴーモラス。貴族のペチトとしてよく売れるのか。
ほひ、この長い耳とフサフサの濃い縁の毛が可愛いだろ？
・・・ああ、手には鋭い爪がある。爪をつけておくれ」

伸ばしかけた手を雪はピタッと止める。

「・・・ふふつ。そんなに警戒しなくともいいじゃ。
ちよーっとだけ気にかけておけばいいんだ」

女は「コーキラスと呼んだ動物を雪の膝にそつと乗せ、雪にウイ
ンクをかる。

逆立てていたモコモコの毛を元に戻し、丸い水色の皿を雪に向け
る「コーキラス。

(緑色の「わわわ・・・?」)

雪は忠告に従い、手を出れない。

鎖を繋がれた両足から「コシ」と伸びる爪が白銀に光り、雪は身を
震わせた。

「さつきはじきなり話しかけて悪かつたねえ。

」の辺はコイツの生息域で、捕まる為にアタシは来たんだけ
ど・・・

泉の岸辺に立つアンタを見て思わず妖精かと思つちまつたんだ

あははっと豪快に女は笑つた。

「まーしかし本当に可愛らしい嬢ちゃんだー」つやあ間違つても仕方が
ないね!

あつと血口紹介しなぐちや・・アタシの姫はアリス。よんじくな

「

差し出された手を見て雪は首を傾げる。

雪の反応にアリスは一瞬怪訝そうな顔を見せたが、手を引いて笑う。

「あつはは、握手を知らないとは難儀な子だね。
で、アンタの名前は何だい？」

「・・・・コキ」

「へえコキっていうのかい。」

ユキって言やあ、空から降つてくる白い奴と同じだ。
寒いのは嫌なのに、あれが降ると何故かそれもどうでもよくなる
んだよなあ」

何故かね?とアリスは笑つた。

(「()でも雪は雪)

雪は自分の名前と同じものがあると知り、少し嬉しく思った。

「人を楽しませる良い名だよ」

(ほめられた・・・)

いい人、と雪は判断した。

「さて、わらそらアタシは行くとするかな。」

アリスは立ち上がり、雪を見下す。

「・・ちなみに聞くが、いつもここに来てんのかい？」

雪は首を限界まで上向かせ、アリスと田が合つなり頷いた。

「じゃあ、また明日来てもいいかい？」

再び頷く雪に、アリスは満面の笑みを浮かべる。

「じゃあ明日またこいよ。おおひ。

約束の丘にその一コ一カラスは置いてくよ」

ガサリといつ音と共に、地面に溜まつた枯れ葉が舞い上がる。

日の光で照らされた白銀の色。

「だあれつかな？」

背後から、やたらとトーンションの高い声が届く。

「アンタ、女に対する扱いを知らないのかね」

「怪しい奴には女も男も関係ないとと思うよ？」

「悪いけど、アタシは『ぐぐぐ』普通の一般人だよ」

首に大剣の刃を当てられながら堂々と、一般人とのたまうアリスト。

その命の駆け引きに慣れた様子にリゾンは眉を寄せた。

「全くそろは見えないなあ」

「何処をどう見ても、ただのか弱い女だろう。」

「……で、この剣をアタシに向ける理由は何だい？」

「あの子に近づく者を警戒するのが俺の仕事なの」

「ふうん。そんなに偉い子なんだねえ」

「そ。一般人が気安く近寄つてい一人じやないんだ。
だからさー、近づくの止めて?」

アリスは、リゾンの言葉を鼻で笑った。

「全く陰で『ソコソ』してる奴がいると思つたら、アンタだつた訳か。
あんな可愛い娘を追い回すなんて、まさか変態?」

「かわいいコを追い回すのは、男の悲しい性つてヤツじゃない?
つていうか話聞こうよ、おねーさん」

くいつと寄せられる刃先を見下ろし、アリスは盛大なため息を吐いた。

「約束、アタシに破らせる氣かい?」

「君の約束なんて、俺には関係ないつしょ」

「あの子を悲しませる氣つて聞いてんだよ。鈍い男だな」

「……だから?」

リゾンの声に少しだけ怒氣が含まれた。

「アタシが見たところなんだけれど。」

「あの子、ちょっと前までかなり人間不信だつただろ？
普通、あんなビクビクしない」

「・・・お前、本当に何？」

ピリリと空気が凍る。

リゾンが出す大量の殺氣がアリスを囲う。

「何をそんなに警戒してるのは知らんが・・・とりあえず、この剣
は退けてもらおうか」

女は首にある大剣の刃を素手で挟み、腕力にモノを言わせて退け
る。

傭兵として、腕力にそれなりの自信があつたリゾンは息を飲んだ。

「アタシは何処にでもいる一般人さ。
ちょっと力が強いだけのね。」

安心しな。あの子を傷付けるつもりは無いよ」

リゾンの拘束から抜け出たアリスは枝を搔き分け、森の中を再び
歩きはじめる。

半身ほどもある長さの剣を手にリゾンは笑み、鋭い視線を彼女の
背中に突き刺した。

「・・・その言葉、今は信用してあげる。

でも、すこーしでも何かしたら殺すからね？

人並み外れた腕力があろうと何があろうと殺す。ね？」

アリスはしばし立ち止まって身体を捻り、視線を合わせて微笑する。

「ああ、肝に命じて明日来よつ」

木の葉に隠れしていくその姿が完全に消えるまで、リゾンは彼女を見つめ続けた。

アリスの気配は途絶え、握っていた剣を背中の鞘に仕舞う。

(要警戒つてことかなー)

泉を振り返るリゾン。

彼の立つ場所から雪は見えない・・が、その視線の先にはおそらく彼女がいるのだろう。

(・・・偉い子、ね)

ムギナやシユリルの態度から薄々気づいてはいた。

詳しく述べ知らないが、おそらく一般人が敬語もなしに話せる人物ではないのだろう。

(嫌な予感がビンビンするう)

長い傭兵時代で培つた第六感が、雲行きの怪しさを伝えてくる。

リゾンはもともとの茶髪を搔き乱し、嫌だなあと呟いた。

「出来れば、あんまり傷つかないで欲しーな」

赤い目が、泉の傍にいるであろつ雪を思つて陰る。

しかしすぐに、リゾンは頭を軽く振つて溜まつた思考を散らした。

「俺が考えてビーにかかるものでもないよなあ

心機一転。

両手を頭上高く上げ、ぐぐつと背伸びをする。

十分に背伸びを堪能した後は深呼吸。

肺に新鮮な森の空気を入れ、いっぱいになれば吐き出す。

幾度か繰り返し、彼は泉へと足を踏み出した。

「さて、脱走癖のあるお姫様の所にでもいこつかな」

彼の顔には、いつものやんちゃな笑顔が浮かんでいた。

「アリス。

お前の役目が今回の任務の要なのだぞ。」

「十分に理解してるさ、隊長」

「それでこのザマか……」

(「コイツ、本当にうるさい。
唾飛ばすなってんだ)

「そもそも、そんな派手な格好で行くから、こんな事になるんだ」

長い金髪をかき上げ、アリスはうそざりとため息を吐く。

「貴様、ため息を吐くな！」

「長いし、うつとうしいし、疲れた。
だからアタシ、もう寝たいんだわ」

「黙れ、この睡眠過多女！」

事態を引つ搔き回しただけのくせに、何が疲れただつ

「事実だ、この幼児め」

「幼児ではない！ ちょっと若いだけだ」

「・・・ちょっと？」

アリスの疑問は尤もの事。

なにせ今、彼女の前で椅子に座つてるのは立派な子供なのだ
ら。

じぼれ落ちそうなほど大きい灰色の目に暗い赤髪。ふにふにツル

ンな紅色ほっぺは、持ち主の機嫌によつて膨らんでいる。

将来良い男間違いなしの彼。だがしかし今はまだ十一歳になつたばかりで愛くるしさが目立つていた。

「これでも一応お前の上司！」

パタパタと駄々つ子のように振られる手足を見れば、どうしても母親にねだる子供にしか見えない。

（何でこんなのが隊長なんだか）

アリスは自身の置かれた境遇に、今でも疑問を持ち続けていた。

「・・・で、何で接触なんかしたわけ？

来たる時まで動くなつて僕は命令したはずなんだけど」

ムスッとして問う少年に、アリスはニヤリと笑う。

「もちろん。全ては主の為に」

「うむ、主の為に行動するのは良い事だな。

だが一向こゝには護衛が居るんだぞつ」

「ああ、流石に気づかれたみたいだな。

でも任務は成功するよ」

「・・・一体その自信はどうから来るんだ？」

少年はしばしアリスを眺め、そして深々と息を吐いた。

「任せてやる。

・・でも、傷なんか付けないよつこじなよ?
じゃないと首ボロンだ」

「分かつてゐるわ。

主には無傷で届ける、それがアタシの任務だからな

じゃあアタシは寝るよ。そつ言ひて、アリスは少年に向いた。

が、途中でふと立ち上まり、思い出した様に少年に向き直る。

「何だ? まだ何かあるのか

「一つ、上に報告しておいて欲しことがある」

「?」

少年の眉間に作られた皺を見たアリスは口の端を上げ、爆弾を落とす。

「今代の神運の子が醜いっていつ情報、あれはウソだ

* * *

そよそよと吹く風。

(これってやっぱ、あの女がコキに渡したんだよなあ)

いつもの様に泉の岸辺で座るリゾンの膝に、これまたいつもの様に雪が座る。

そして、いつもと違つて雪の膝で丸まる縁の生き物。

手足を鎖で縛られている所為か、それとも雪に害はないと判断したのか。理由は分からぬが、ニュー・モラスは雪に対してだけ何故か大人しい。

(まだ大人になつてないし、ユキに母性を求めてるんだろうな)

なんとも微笑ましい想像に、リゾンの目が生暖かくなる。

「飼うの?」

これだけ大人しいのだから、とニュー・モラスに伸ばされていたコキの手がピタリと止まる。

(飼うひつたら、餌代とかどーすんだろ?)

リゾンを雇う時でさえ、金は無いとムギナから断言された程であ

る。人間四人でも相当苦しいのだ。

(まーあの人達なら意地でもコキの願い叶えそつだけどね)

「飼うんなら、シユリルとかに言わないとね?」

「かわない」

「え、飼わないの?」

てつまつと飼いたいのだと思い込んでいたリゾンが目を見開く。

雪はこくつと額き、中途半端に伸ばしていた手を下げる。

「やくそくの印だから、明日返す」

「ふうん。返すんだ?

でもコイツ、物じやないぞ」

リゾンの声のトーンが低まつた。

おそれらべりの二コ一モラスは、あの女が雪に近づく為に用意した道具。

(つまりは、返されても用済みつてこと)

女の元へ返却された二コ一モラスは殺されるか、それとも森へ放されるかのどちらかに違いない。

まさか本当に貴族に売るなんていう、自分を他人に見せる行為はしないはずだ。

(・・俺の予想通り、アイツが彼の国の隠密なりば、きつとやつするはず)

たとえ運よく森へ放されたとしても、親から引き離された子供はいずれ死ぬ。

(それは・・ちょっと無責任じやないかな?)

流石野生育ちだとでも言ひべきだらうか。

リゾンの不機嫌をいち早く悟ったニュー・モラスが雪の膝でバッと頭を上げる。そして、ひとと警戒の眼差しをリゾンへ向けた。

チャリリと、動きに合わせて鎖が鳴る。

音に導かれ、雪はニュー・モラスの鎖に左手を伸ばした。

その時、彼女の瞳に映つたのは四つの赤く丸い花弁と鎖。

何をもつてしても消えなかつたタバコによる火傷の痕。

他の傷はもう何処にあるのかすら分からぬほどなのに、それだ

(タバコの・・・)

けは今も在り続けている。

全く薄くなる様子もなく花のよつに在るソレが、雪にてとても恐ろしく思えた。

(またいつか・・・敵が・・・)

右手で左手を覆い、傷痕を視界に入れないようにする。

(へわり・・あつとハコモの手とては同じ)

私の手に残る傷痕と同じ。

キュウッと左手を掴む力が強まる。

ふるふると鳴くニューモラスが雪を見上げた。

(いやだ。同じにはなりたくない。
手を痛めつけた敵と同じことはしたくない)

琥珀の田に何を見たのか。ニューモラスは鎖に触れる雪の両手に頬をすりつけてきた。

ふわふわとした毛が手に優しく降りかかる。

「ふるふる」

雪の目が僅かに見開かれ、そしてフツと細められた。煌めくその

目が、動かぬ表情の代わりに全ての感情を語っていた。

そんな、元のように和み始めた空間に雪の背後から声が割り込む。

「ねー、ユキ。

「ユーモラスって偉い人がペットとして飼う動物なんだ。
・・・飼うんだけどね。でも、その偉い人はコイツらに何もしない

い

「なんで・・・」

「野獣」ときに金を使うのがもったいない、だつて。
「ユーモラスなんて森に入ればわんさか居るから、新しく買った
方が安いってわけ。
だからほとんどが餓死する」

あまりの残酷さに震える雪。

(死んじやう・・・)

雪は再び鎖を見る。

「くさり

「ん? 何?」

「くさり、取りたい

雪の手の中でチャリと音が鳴る。

「返すんでしょー。

そのままの方がいいんじゃない？」

不快感をわざと煽る様なリゾンの言葉に、田の前の頭が左右に振られる。

半身を捻った雪はリゾンと田を合わせ、必死に訴える。

「かい・・たい。

いつしょに、いたい。」

リゾンがほうっと息を吐く。

(・・・うん。それでいいよ。
それが俺の求めていた答え)

この汚れを知らない純粋そうな子には、いつまでも優しくあって欲しい。

(これはエゴ。

自己満足を押し付けているだけだと、分かってる。

・・・けど、彼女には)

手の中に飛び込んで来た弱者を簡単に手放す様な人にはなって欲しくない。

そう思つ。

(でもちがつ)

「おこ、ルキ？」

てしまふ。

(へきり・・・同じことまだめ)

でもその思いは間違いなのだと、左手に残る痕を見て気づいた。

初めて見た時、純粋に欲しいと思つた。

* * *

手を離せば逆に殺す事になるのだと知り、ニューモラスの鎖を握る手が震えた。

こんな鎖、無ければいいのに。無かつたら、敵と一緒になんて思わなくて済むのに。

最近よつやく慣れてきた話すという行為で、自分の気持ちをリゾンに伝えてみる。

怒られると思った。

でも実際に返ってきたのは、笑顔。

思い出し、知らず知らずの内に雪の頬が赤みを帯びる。

「おこつて」

いつも二口りとしか笑わない顔が、至極幸せそうにふんわりと微笑していた。

とくん・・

不意に大きくなつた心拍音を隠すよつに、雪は自分の胸に手を当てる。

(あれ・・・?今・・・なに?)

分からず、首を傾げた。

「ユキ!...」

急に耳に入つてきた声にビクリと体を震わす。

「・・・ザツキ」

雪を見下ろす紺色の田とその上でなびく金茶色の髪を見、よつやく今自分がいる場所を思い出した。

今雪が居るのは、孤児院の草原。

リゾンは孤児院まで雪を送り、後は彼の役田だよねとムギナを呼びに行つてしまつたのだった。

する事もなく、ザツキと一人ではしゃぐ子供たちを眺めていた・・・はず。

(忘れてた・・・って言つたらおこるかな?)

16 波乱の予感（前書き）

お、遅くなりました・・・
少しでも良い文章になつてるとこいのですが。

「大丈夫か？
顔めっちゃ赤いで。熱あるんちゃうか？」

ザッキの言葉に軽く首を振つて返事をし、ぴたりと寄り添つてユーモラスを撫でる。

その手足に、すでに鎖はない。

雪の反対側にはルリアが陣取り、ユーモラスを興味深げに眺めている。

じいーっと瞬きする事なく彼女の翠の目はユーモラスを見ている。

「大丈夫なら、ええんやけど。
でどうや、会つか？」
「・・・えつと・・・・・」
「聞いてなかつたんやな」

しゅんとする雪に慌てたザッキは、いや実はなと切り出す。

「明日、俺らの兄ちやんが帰つてくれんねん！
兄とは言つても、孤児院が一緒やつたってだけやけど」

照れ臭そうに、それでも嬉しそうに笑うザッキ。その笑みから、どれだけ義兄を慕っているのかが分かる。

「雪にも紹介したいんやけビ、念えるかって話やつてん。
じつやへ？」

「かっこと笑うザッキに、雪がついと急ひた。

「兄ちやんはわいりの嫌な奴とちやつ。
ゴキもあつとわづかずせ。余つてみいくん？」

雪はウロウロと視線をさまわせる。撫でる手が止まつたのを疑問に思つたのか、ニコ一モラスが頭を上げた。

「ふぬるぬ」

早く撫でてくれと鳴べニコ一モラスを見、じつと返事を待つザッキを見る。

戸惑う雪から返事を予想したのだつ。ザッキは眉をハの字に曲げ、がつぐつと肩を落とした。

「無理強こはせんけど・・・
もし会つ氣になつたんなら、明日来て?」

悩みながらも頷く雪に苦笑するザッキ。

二人のやりとりに飽きたのか、ニュー・モラスが身体を転がす。

「あつ毛なめなめしてるぅ！」

ルリアの素つ頬狂な声が辺りに響いた。

暁が終わり、夕方に近づく頃。

シャツと暗色のカーテンを引き、一畳を避けようとする家があつた。

「それで・・・相手は一体何者だと？」

* * *

閉め切ったカーテンから手を離し、シユリルは背後のテーブルを振り返る。

そこにはリゾンとムギナとが向かい合つて座っていた。

「あれはたぶん、ニシーノ国の人だと思つた」

いつもは穏やかなムギナの顔が緊張で固まつた。

「何故そう思うのか、聞いてもいいですか？」

「ニシーノは間諜にも国色を徹底されてるつて、傭兵やつてた時に聞いたんだよね。

赤とかいう目立つ色、きっとそんな強制でもなきや着ないでしょ

あんな派手な色で目立たず動くなんて無理つーか無茶。そう言って苦笑するリゾンをシユリルがキッと睨む。

「軽口を叩いている場合ですの？！」

「何故ニシーノ国が・・・」

「それはあんた達の方が良く知ってるんじゃない？」

激昂するシユリルを冷めた目で見るリゾン。

「・・・」

黙々と何かを思案し続けているムギナをチラと見、リゾンは息を吐く。

「そろそろ教えてくんないかな？」

最初から変だと思つてたんだ。

・・・・あんた達がそこまで守るひとするコキッて、一体何者？」

シュリルはべつと奥歯を噛み締め、口を真一文字に引き結ぶ。

深い信頼を込めて、シュリルは元上司であるムギナを見た。

「・・深くは言えません・・しかし、本来は国をあげて守らなくてはならない御人である事は間違いありません」

ため息と共に吐き出された言葉。

リゾンはふうんと言つて手を組める。

「国・・・ね。ユキは国を動かす存在なんだ？」
「さて、それほどひでじょうね」

（少なくとも今の現状では、陛下への影響力は既無ですじ）

続く言葉を心に留め、ムギナは苦笑いを零した。

「そこは教えてくれないって事かあ。

・・・まあいいけど」

真意を探るうと光らせていた目を、ムギナから反らす。

柄にもなく、二つの間にか緊張していたらしく。リゾンは、前の

めりになつていた身体を椅子の背に投げ出した。

同じように、緊張で強張つていた身体をほぐすムギナとシユリル。二人は、深く聞かれなかつた事に安堵していた。

しかし、続くリゾンの言葉に酷く動搖することとなる。

いわく・・・

「あーでも、だから王様がゲートに来るんだね」

「「陛下がここに立つ?」」「

目を見開き問う一人の形相は凄まじく、自然とリゾンの椅子が後ろに動く。

「あ、ああ。街で噂になつてるんだ。

でも、いつも食料を買いに行つてるシユリルが知らないって・・・
どうなの、ソレ」

リゾンは呆れ、ため息を吐いた。

それに対し、窓辺でわたわたと意味不明な動きをするシユリル。

「十日分を、まとめ買いしてましたから・・・」

「あーそれで知らなかつたんだ。

実はこの噂、なぜかゲート領主が必死に隠してたみたいで、広まつたの最近らしいし」

気の強いシユリルが、しょんぼりと申し訳なさそうにうなだれる。

「それならば仕方ありませんね。

・・・で、噂ではいつ頃着くと?」

テーブルの上に置いた手を拳に変え、ムギナはリゾンを見た。

「あー・・・それが・・・」

氣まずそうに言い淀むリゾンの反応から続く言葉を予想し、一人は揃つて肩を落とした。

風呂に入つたお陰で、身体はホカホカと温まつていた。

湯気の立つ身体を薄ピンク色の長い夜着がピツタリと覆う。水気を含んだ黒髪から落ちた雫は、服を濃いピンク色に変えていた。

「あ・・・あの、ユキ様？」

その夜着を用意したのはもちろんショリルである。しかし雪を見る彼女の心情には、それを褒め讃える余裕が無かつた。

何かを話そぐと口を開き、迷つて閉じる。それを繰り返す彼女に雪は首を傾げる。

「あ・・っ！」

-۶۷۱-

言ひやシニ川！

自分を叱咤し、当たつて砕けるとばかりに口を開くシユリル。

「どうか。どうかのシユリルに髪を乾かせてくださいませ！」

ギュッと田を閉じて俯き、返事を待つ。

• • • • •

沈黙が部屋に満ちる。

それに堪えかねたシユリルは恐る恐る顔を上げ、雪を見つめる。

(かみ・・・?)

雪は自分の髪を見る。

真っ黒で長い髪を見て思い出すのは、敵に引き受けられたる感覚。また同じ事をされるのは、とうとう思ひが頭の中を駆け巡る。しかし、ふんぶんと首を振り、すぐに想像を否定した。

(・・しない。シユリルはしない)

頷いて答えようと勇気を出して顔を上げれば、何故か物凄く落ち込んでいるシユリルが見えた。

床に座りこみ、涙でスカートに染みを作っていた。

何故?と雪は首を傾げ、そして思い出す。

「あ」

(ぐび・ふっぢやつてた)

いつも考えを振り払うために使つてた行動が、シユリルに誤解を与えていたのだ。

しばし逡巡した後、雪は彼女に歩み寄つた。

「シユリル」

美しく澄んだ声に、彼女の顔が上向く。

「かみ、かわかしてくれる？」

まさしく鶴の声。シユリルは急に元気になり立ち上がつた。

「もちろんですわ！」

涙目で笑うシユリルに導かれ、雪は全身鏡の前に置かれた椅子に座る。

シユリルの持つ布に、髪の水分が優しく拭されてゆく。

「ふふふ」

恍惚とした笑みを浮かべたシユリルが鏡越しに見えた。

「一つ、私の夢が叶いましたわつ」「うれしい？」

「はーー。」

満面の笑顔でシユリルは頷く。

(うれしいは幸せ)

ほんわかと雪の心が温かくなつた。

「ユキ様はどうでした？今日、何か嬉しい事はありましたか？」

(うれしこじと~.)

考え始める雪を、シユリルの優しい手が見つめる。

そして突然、何かを思い出したのか、雪の顔が真っ赤に色づいた。

(あらりりり~.
なんじょうか、その恋)

何やうにけないモノを見てしまつたよつた氣がして、シユリルの顔から血の氣が引いてゆく。

「なんで・・」

「ユキ様？」

「へんなの」

鏡を見れば、ちょうど心臓のある辺りに手をそえた雪の姿が。

シユリルにとつても覚えのあるその行動は・・・

(一體誰に惚れたのです、コキさまあ―――――っ――)

シユリルの口から、呻き声が漏れた。

16 波乱の予感（後書き）

活動報告に、アンケートを設置しました。
気が向きましたら書き込んで下さい。

17 動く盾

その暗い部屋では、ゆらりと揺れる蠅燭だけが唯一の明かりだった。

狭いベッド端に腰掛け、ムギナは一人自室で考えを巡らす。

「陛下は、おそらく見られたのでしょうかね」

（それでもなければ、ここに来るはずがない）

ムギナの脳裏に古びた箱が浮かぶ。

ムギナが神官首の座に就いた祝いとして、先王に一度だけ見せてもらつたのだ。

その箱は、貴族や民たちの間で昔から存在の真偽が問われて続けてきたものらしく。先王から直々に『王錠の箱』という名だと明かされた時は、心臓が止まるかと思つほど驚いた。

王錠の箱を見る事ができたのは、先王のムギナに対する搖るぎない信頼があつたからこそだつ。

(しかしあれには、『』一部しか書かれていなかつたはず。

それにも関わらずここへ来る。

という事は・・そこまで追い込まれていたのですか、陛下（

「まあ、あれだけ華やかな生活をされていたのですからね。女口呪りに我慢出来ないのも無理からぬこと」

ムギナの顔にじわじわと苦い笑みが広がる。

「正直さがあみうと思わなくもない。・・后、むじうもうと苦しみばいいとも思ひ。

「運命から逃れられませんよ、陛下。

どうやら私は未だ神官首のようですかから。

その時が来るまでは、たつぶつと後悔をせて差し上げましょう

ムギナは、先日孤児院を訪れた時のことを思い出していった。

『新しい神官首? 何ですか、それ』

孤児院の院長であるハミリイからその言葉を聞いた時は、驚愕のあまり身が震えた。

王に逆らひ、神運の子を危険な地へと追いやるよつて進言する。それは一歩間違えれば、神殿と王家の関係を悪化させかねない行為である。

だからムギナは、もつ神官首といつ座から降りされたのだと当然のよつて思つていた。

しかしゲートにある神殿から、次なる神官首が任命されたとかいう通達は来ていなかつて。

(私でいいのでしょうか？)

まあ、神官首のままであつた方が都合はいいのですが。
・・・・本当に、今ほどこの地位に感謝した事はないですね（）

不穏な者達に狙われている雪を守るには好都合な地位。

あの真実を保持していても何う問題のない地位。

ムギナは膝に置いた手をきつと握り締めた。

全ての真実は、当事者 王と神運の子 にしか明かされない。

神官首は彼らが知る時の時だけの為に存在し、眞実を代々口伝でのみ受け継いできた。

(通例ならば婚姻の儀の翌日に行われる密儀にて、最上の方から知られるはずでしたが・・・)

ディレイの拒絶により流れてしまった。

「あの聰明な陛下も一応何らかの策を講じてはござりしだしょ
うが・・・。
愛のない策は、おそらく最善のものではない」

歴代の王達は神運の子に一目で惚れ、そして週^ハす内に離れられない事を知る。

逃れられぬ未来を知った彼らは、強固な守備で彼らの妻を必死に護つたと云う。

・・・しかし今代の神運の子、雪^ハそれがない。

(だからシーノ国はコキ様を狙つ・・・?)

「いや、違いますね

国の要である王より雪を狙う。そんな隣国の行動に嫌な予感がするムギナ。

これまでの王ならば、神運の子は確かにラジエヌ国との弱点であつた。

しかしそれは、彼女達が王の寵愛を一心に受ける存在だからだ。今の雪の状況にはない。

ディレイにとって雪は、ラジエヌ国と天秤に掛ける程の価値を持たない。

では、ニシーノ国がそこまでして雪を求める理由は何か。

「ニシーノ国がコキ様によつて得られる価値……まさか

なんとも恐ろしい考えに行き着き、ムギナの顔から血の気が引いてゆく。

(・・まさか、知られている・・・?)

あの、本人達にでさえ未だ知らされていない真実を。

神運の子という存在に隠された重大な事を。

(いや、そんなはずはない。
だがもし知っているのなら)

雪は確実に・・・

殺される。

・・・　と、廊下で小さな物音が聞こえた。

敵かと腰を上げたムギナは、予想以上に軽い足音に首を傾げる。

「ああ・・もうこんな時間だったんですね」

カーテンの隙間から見える空が、赤く色づいていた。

(こつものな早朝に出かける準備をなさつたのですか)

道理でいつも気づかないわけだと笑つ。

ベッドから腰を上げ、ムギナは音を立てずに浴室のドアに歩み寄る。

そしてゆっくりと押し開いた。

まさか開くとは思つてもみなかつたのだろ？

廊下には、無表情ながらも田を見開く雪の姿があった。

「ユキ様、少しお時間を頂いても宜しこうか？」

雪は首を傾げ、しばらくすると首を縦に振る。

(そんな、そんな恐ろしい事・・私はさせません。

ですから、まずは一つ目の策)

彼に似合わぬ挑発的な笑みが自然と浮かんだ。

＊＊＊

まだ見えぬ目的地の方向を、まっすぐに見据えていた目。

ふいにその視線が逸らされた。

「・・・・」

鬱蒼と繁る木々が作り出す影を見て、女の眉間に浅く皺が形作られた。

軽く手綱を引き、乗っていた愛馬の足を止める。

「不用意な連絡は止めよと命じたはずでしょ？」

不快だと言わんばかりに低い声音が彼女の口から漏れ出る。

彼女の声に弓を引かれるよつこ、道端に生える木の影が揺れ動いた。

「仕方ないでしょ?」

報告する事ができたんですから」

「…へえ?」

では、さつひとと報告なさい。ちつちやな隊長さん」

相手の返答で機嫌が良くなつたのか。馬上の女は興味深そうに田んぼを煌めかせた。

対し、二つの間にか木陰で跪いていた少年が頬を膨らませる。

「身長が低いのは、年齢ゆえですよ」

自身の外見に何やら不満を抱いているらしい彼は、幼く見られる最大の原因が自分の言動にある事に気づかない。

ムスッとしたまま、少年が女を見上げる。

「闇からの」報告を御身に。

今代神運の子について、お伝え致します

「言つてじらん」

「はつ。

神運の子を田にした闇によりますれば、彼女の姿はその役目には相応しいものであったとか

「あら?・・・噂が間違っていたって事かしら」

「ええ」

馬がぶると震え、鳴いた。

張り詰めた空氣を感じたからであらう反応に、女は凍つた空氣を緩める。

「ちつちやな隊長さん」

「僕にはHフとこう名があります」

再び膨れる頬に、女は笑う。

「知ってる。・・Hフ、予定を早めるわ。

必ずあらうの王が眞実に気がつく前に例の子を私に届けなさい」

木の影と相まつ、濃く色づく赤黒い少年の髪がなびく。

少年の灰色の目が眞紅の目を見上げた。

「・・・闇は常に貴女と共に」

命令通りに従つ意思を示し、少年は深く頭を下げた。

18 虚像（前書き）

遅くなりまして申し訳ありません。·orz
書き方がイマイチ思い出せてませんが、「修正ならば後でも出来る
」という図太い考えで更新してしまいます。

こつものよつに森の中を歩く。

腐葉土は優しく雪の足を受け止め、繁る草木は朝露を輝かせて彼女を歓迎する。

木漏れ日は黒髪を艶めかせ、ワンピースから出る細い手足を白く透き通らせた。

それは、まるで著名な画家が一生を費やして描いた絵画のような光景。

「ふるるるる」

こつもとは違つ、腕に抱えたふわふわで温かい感触に雪は田を細める。

本人が自覚することなく形作られた笑みには、確かな愛があった。

「やあ、来ないかと思つてたよ」

湖の岸辺に立つ女は、前に会った時と同じく赤い服を着ていた。

(赤が好きなのかな)

雪は無表情に戻った顔を傾ける。

そんな雪の行動に気づかず、女も彼女に抱かれる「ユーモラスを見て首を傾げた。

「・・・えらくおとなしいな。

野生だから、人には懐かないはずなんだが」

女の視線を追えば、ふりゅっと鳴く「ユーモラス」と田が合ひ。

(かえしたくない)

しばし田を閉じ、そして強張った表情を女へと向けた。

「ください」

澄み切った美しい声に女はハッとする。

「この子をください」

雪の琥珀色の田を見た女は、一瞬我を忘れそうになる。

何かを切望して輝く雪の田は美しく、見ていると飲み込まれそう

だ。

(あの田で言われたら、何でも聞いてしまった) それで

そんな事をすれば自分の命が危ういと分かっていて
も、そう思つ。

無条件に人を惹きつける。

(これが神運の子、か。
初めて恐れを感じた気がする)

女は自分を嘲笑う。

(こつもの私ならば、確実に殺しているな。
・・いや、あと少しで殺していた)

闇に生れる女だからこその感じる予感。

「のまま生かしておけば、雪は確実に邪魔となる。

背中に隠したナイフへ、あと数センチといつ所まで伸びていた手
を戻す。

(咄嗟に止めた自分を褒め讃えたい。

本能を理性で止めるなんて、流石あたしだね。

ま一止められてなきや、あたしの命も消えてたんだわ(泣)

ブツブツと咳きながら、頭を整理する女。

そんな彼女の耳に忘れかけていた問題が舞い戻つてくる。

「・・・ダメ？」

声の主を見れば、潤んで光る瞳と鉢巻。

泣くのを必死に我慢している所為か、田元の頬はほんのり紅い。

「ダメ？」

傾げられた頭から黒髪が、サラリと白磁の肌に滑り落ちた。二つの色の差に、女の背筋がゾクリと粟立つ。

（ははっーお姉さんったら、初めて色仕掛けにやられそうだよ）

女の目が虚ろに光った。

そんな風にして雪が女に猛アタックをしている光景を、彼らの頭上から眺める者がいた。

「あー・・あれば無理だろーねー。
俺がやられなくて良かったー」

細い枝の上に器用に腰掛け、リゾンはカラカラと小声で笑つ。

「おひ~あのコキが抱きつこてるー」

(いじょつて言われたんだるな)

「ああ、ひつと腰にしがみつかれ、慌てる女が眼下に見えた。

一シーノの間諜であるはずなのに、完全に雪に翻弄されてこる。

「ひつはー末恐ろしい子!」

「・・・ねえ少年、君もそいつ思つてしょ?」

リゾンが振り返つた先にある木の枝に少年が立つていた。

「少年言ひつな、童顔」

気配を完全に消していたはずなのに、気づかれた。その事実が少年の頬を膨らませる。

何かしら言ひ返したいと思つて声にしたのは、予想以上に餓鬼っぽいものだった。

「でも年齢的に君は少年だよ?」

「なんだ」「だわるの?..と意外に問ひコゾン。

少年はそれに答えず、ふいと皿を逸らした。

「あー分かった。あれだあれ。

少年は年上のお姉さんに恋してゐるんだなーーーんでもって、年齢差に悩んでるとかーーー

「・・・・・なつー」

リゾンの言葉に、少年の顔が真っ赤になる。

「・・・え、図星?」

あてずっぽうだったのに、と言いつこゾンに少年が苛立つ。

「黙れ。てか、少年言つな

「じゃあ、名前教えてよ?」

「・・・・・・・るくせに」

「あーいー?」

「知ってるくせに、聞くな!

いつまで惚けているつもりだ!平和ボケか貴様」

途端にリゾンの顔から表情が抜ける。

「お前まさか神運の子にほだされたんじゃないだろうな?」

少年が険しい表情で、リゾンを睨みつける。

「違うよ」

予想外に平坦な口調で返され、高ぶっていた少年の感情が鎮まる。

「実行は明日だ」

「そう」

「元闇隊長らしく、きちんととやれよ」

「・・・そうだね」

悲しげに陰るリゾンの目を見て、舌打ちをする少年。

「なんでお前なんかが、主のお気に入りなんだつー！」

そう言い捨て、少年の気配が消える。

「ほんと、なんでだろーね？」

苦笑するリゾンの視線の先には、ニコーモラスと駆け回る雪の姿があつた。

「俺も・・・俺も鎖で繋がれてるんだって知つたら、ユキはどうするかな？」

(くださこいつてお願いしてくれるかな?)

あの何も知らない少女の側でずっと笑つてられたら、どれだけ幸

せだらけ。

リゾンは「ヨーヨーラスを羨望の眼差しで見る。

「いいなー」

(俺もそつちに行きたい)

リゾンは悲しげな笑みを浮かべた。

「ぐめんね」

謝る理由は一つ。

今まで騙していたからと、これからまた騙すから。

(本当の事を知った時、ユキはどう思つかな?)

知らせたくないと思つ。

でも、それ以上に・・

「ユキを壊してみたいと思うんだ。
壊したら、きっと楽しいよね?」

眩くリゾンの赤眼には、確かに狂氣が渦巻いていた。

「ふーん・・・で、ニュー・モラスを貰える事になつたわけ
「うん」

「クリと雪は、リゾンの膝に座つてゐる。

信頼しているのだろうか。ぐてつと彼に身を預け、口元を僅かに
緩ませてゐる雪。

「そ、良かつたねー」

よしよしと雪は頭を撫でられる。

(あつたかい)

二つかの様にやつ思い、雪は田を開じた。

肌の上を流れる穏やかな風。

下ろした瞼の中でも感じる優しい光。

絶対的な安心感を与えてくれるリゾンの気配。

(「のままずっといたい」)

・・・・・ああ、これがたぶん

「しあわせ、見つけた」

田を開けて上を見れば、不思議そうな顔のリゾンがいる。

視界に入れた途端に胸が温かくなる。

雪は手を伸ばし、リゾンのもさうとした髪を一筋つまむ。

「・・・ユキ?」

ふわりと笑って、雪はつまんだ髪を引っ張った。

「痛い！何、どうしたの？」

彼女の手に従い、リゾンの顔が下りてくれる。

「いたつ、痛いって！」

近づく彼の耳元でさつと囁く。

「一番のしあわせ、見つけた」

髪を離されたリゾンの顔が、一瞬くしゃりと歪んだ。

しかしそうに、いつもの笑顔を見せる。

「そつか

「うん」

頷くと同時に抱きしめられる雪。

「？」

「・・・」めんね

「なに？」

こつにない行動に雪は戸惑った。

「ううん、何でもないよー」

パツと離れられ少し寂しく思つも、くしゃくしゃと撫でられて再び満たされる心。

「ヒーリング、マギナとかシユコルには言つたの?..」

突然の変わつた話が分からず、雪は首を傾げる。

「ヒーリングを飼いたいって事」

「・・・」

「忘れてたんだー」

リゾンは、ふうとため息を吐いて苦笑する。

「今夜言いつつ、

そして、頷く雪に優しい笑みを浮かべた。

19 義兄の知らせ（前書き）

17・18話をお読みいただき、ありがとうございました。

説明文を増やし、ちょっととばかし雪を大胆にしました。

今後、表現等に修正を加える事がありますが、大きな変更はこれ位にしようと思います。

右往左往して申し訳ありませんでした。

19 義兄の知らせ

温かな重みが頭の上を何度も往復する。

「今日もこの後孤児院に行くの？」

リゾンの腕の中、うとうとしかけていた雪の目がパッと開いた。

（わすれてた……）

ザツキの義兄が来るという事を思い出し、顔から血の気が引いてゆく。

「…しらない人」

「ん？」

「しらない人がくるって言つてた」

「へえ」

この状況で来る人ねえ、とリゾンが笑う。

彼の笑みは、雪の背を粟立たせた。いつも見せるような子供っぽいものではなく、何かを見下しているような……そんな笑み。

雪は、こんな表情を何処かで見たような気がした。

「会わないの？」

違和感のある表情を消し、リゾンが首を傾げて聞く。

じつと見つめる赤眼から雪は視線をそらした。

「知らない人だから怖いのー？」

(こわい)

リゾンの膝の上で震える雪。

雪を心配したのか、近くで丸まっていたユーモラスが鳴いた。

「案外簡単に克服できるかもしれないよ？」

人が傍にある事の幸せを知ったユキなら、人見知りを克服できる
と思うけどなー」

「ひとみしり・・」

「うん、人見知り。

ユキのその怖いって奴、たぶん簡単に言っちゃえば人見知りだと
思うんだよね」

リゾンは雪の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「ユキ、行つておいで」

有無を言わせないリゾンの満面の笑み。

雪は視線を揺らしながらも、こくりと頷いた。

そうしてしばらく泉を眺めた後、ムギナと孤児院へ向かうべくゾンを連れて一度家に帰る。

「すゞ」と朝出でいくのを今日も見ましたわつ！
また寝過ごしたのでしょうか？…」
「えーだつて、一人の時間を大切にって言うだろー？
「護衛が護衛対象を一人にしてどうするのですか！
本当に役立たずですわつ」
「一応ちゃんと役には立つてるし
「どいがですのー。」

そんな怒声に背中を向け、穏やかに微笑むムギナと家を出る。

「今日も愛しーシューリルの声が聞けて、私は満足です」

ムギナの言ひ声葉にしばし首を傾げ、雪は納得したよひに頷く。

「・・おや、私の気持ちが分かりますか

不思議そつに見てくるムギナに、再び頷く。

「声を聞いたり、しあわせ」

リゾンの瓶は安心する。

魔氣を貰える。

だから

「わかる」

ムギナは田を見開き、そして本当に嬉しそうに笑んだ。

「そうですか」

（ゴキ様は本当に成長がおはやい。

ちょっとでも田を離したら、見失つてしまいそうだす）

背後から聞こえる軽い足音にムギナは、あれ?と警る。

（私の気持ちが分かるって言いましたよね?）

気付いてハッとした。

それと同時に身体から血の氣が引いてゆく。

(これは・・・流石に・・・大変な事になりましたね)

脳裏に五代田の記録が走馬灯のように流れます。

(・・・しかし、陛下の耳に入らなければ良いだけのこと)

焦ることはない。

長く考え込んでいたのか、気づけば孤児院のある丘に来ていた。

ハツとして後ろを見れば、ちゃんと雪はついて来ている。

(シユリルは、気を抜いた私を怒ってくれるでしょうか)

孤児院の前でザワザワと子供達が集まり騒ぐ光景を見ながら、ムギナはひつそりと笑んだ。

「あんなに集まって・・・一体何が?」

ムギナの言葉に、緊張で俯いていた雪がハツと顔を上げる。

「ユキ様、何かご存知ですか?」

孤児院へと歩きながらムギナは聞くが、雪からの返答はない。

「「コキ様？」

「「コキ！」

「おねーちゃんんだつ」

ムギナの言葉を遮るよひにして、ザッキヒルリアの声が届く。

雪を見つけた二人は彼女の元に走り寄り、雪はルリアに手を引かれる様にして集団の渦へと巻き込まれる。

「・・・」

人自身をあまり好きではない雪は、突然引かれた手を戻そうとする。雪よりも力の弱いルリアが相手であつた為、簡単にそれは外れた。

だが、その自由になつた手を今度はザッキが掴む。

「兄ちゃん！」

雪を引っ張りつつ、たくさんいる子供達の中から声をあげるザッキ。

その喜色ばんだ声に、中心で笑っていた男が視線を移した。

「おおつ、ザッキやんか！大きくなつたなあ

男は一つ編んだクーム色の髪を肩にかけ、眼鏡越しに深緑の田を嬉しそうに細めた。

群青色のジャケットとズボンをあわると着こなし、腰には細身の剣を身につけてる。

「へへへ。兄ちゃんなん、なんや決まつてんやんか」

照れ笑いを浮かべながら偉そつとザックの髪を男が撫でる。
「ザッキのくせに態度がでかいでー。」

金茶色の髪をくしゃくしゃされても笑うザックを、若干羨ましそつて雪は見ていた。

「おーその子、誰やっ..」

雪に気付き、男はザックに聞ぐ。

「ユキ言つねん!」

俺とルリアの友達なんや

「へえ、ユキちゃんか」

男はやつぱりと、雪と視線を合わせる為に腰と膝を曲げる。

「どもー・グラントヴィア言います。」

血は繋がつとひさけび、ザッキの兄やつとつまわ。よひじゅう

「・・・・・」

差し出された手を見下ろし、雪は固まる。

グランヴィアと名乗った男は雪の右手を強引に握り、ぶんぶんと上下に振った。

「兄ちゃんはな、ラジエヌ国に仕えてるんや。や

孤児院から初めて上の地位に行つたつて有名やねんで！」

傍で力説するザッキをよそに、グランヴィアはでれつと顔を崩す。

「可愛えーなあ

「・・・・・俺の説明が合なじやんかっ

「おっと、すまんすまん。

ザッキのお陰で大事な用を思い出したわ

「・・用？」

急にキリッと表情を正したグランヴィアを不思議やうに見るザッ

キ。

「ちよつとまたゲートが荒れそつでなあ

「それつて・・・

顔を青ざめさせ、ザッキは言葉を途切れさせる。まるで聞こたくなといつ様に口を開きし、心配そうにグランヴィアを見つめた。

「そ、戦争や」

苦笑を浮かべ、グラントヴィアはザッキと雪を見た。

彼らの周りで騒いでいた子供達が一気に静かになる。

「皆逃げるんや。」

院長にはもう血つてある。

死にとうなかつたら院長と一緒に逃げる」

真剣な様子に、誰もがグラントヴィアの言葉を信じた。

戦争は起らるのだと理解した。

「こ、兄ちゃんは？」

答えを分かつていてそれでも問うのは、予想を信じたくないからだ。

「もうりん従軍すんでー。」

軽くやつ言い、グラントヴィアは震えるザッキに向かつてフワリと笑った。

「ラジエヌ国軍は強いから大丈夫！
心配は無用っちゅーやつや！」

その言葉が真実かどうかは分からぬ。

しかしグランヴィアの声には義弟を安心させる何かがあつたらし
い。聞いたザッキの表情にはぎこちないながらも笑みがあつた。

ザッキは血の繋がらない兄を想い、グランヴィアも血の繋がらない弟を想う。

互いが互いを大切に思つてゐる事の分かるその光景を、雪はとて
も眩しく感じた。

(これがきつと合つてる。

敵と私がおかしかつたんだ)

正しい家族のあり方を、雪はこの時初めて知つた気がした。

ふと朝にムギナによつて左手に巻かれた包帯を見下ろす。

(これもたぶんおかしかつたんだ)

包帯で隠された火傷の跡を思い出し、母親に暴力を奮われる事が
異常なのだと雪は悟つた。

「帰る」

「 ゴキ？」

突然の雪の宣言に、ザッキは首を傾げた。

「逃げるために帰る」

（敵から逃げられたのに・・死にたくないー）

いつになく必死な雪に、ザッキも真面目な表情になる。

「分かった。

また落ち着いたらゲートで会おうな？」

「戦争が終わっても、事後処理でしばらく俺はゲートに居ると思つわ。

やからまた俺とも会つてくれな？」

ザッキとグランヴィアの言葉に、雪は頷く。

背を向けて歩きだした雪をじつと一人が見つめていた。

しばらく歩くと、国境の街ゲートを縦断する大きな街路に着く。

「の道を越えなければ家に帰る事は出来ない。

いつもなら隣に立つムギナが馬車に気をつけてくれるのだが、何故か孤児院に彼の姿は無かつた。

(・・大きい)

雪は一人街路の端に立つて、田の前にそびえ立つ馬車を見上げていた。

馬車の色は群青。

とんでもなく立派な馬車の扉には、一輪の白い花が描かれている。

薔は閉じ、ひょりりと伸びる枝には葉が一枚しかない。

(きれいな花。
本当にある花?)

首を傾げ、じっと絵を見つめる雪。

馬車の扉は田の前でゆきくつと開き、

「・・・・あつー」

雪の中に取り込んで素早く閉まった。

20 身勝手な邂逅（前書き）

後々、もつ一度書き直すと思こます。

20 身勝手な邂逅

視界に入った瞬間、目を奪われた。

手に入れた温もりを逃がさない様に強く抱きしめる。

ぎゅっと強く。

壊さぬように気をつけながら。

ラジエヌ国では建国当初から、広大な土地を数百人の領主に分散し、それに自治を任せってきた。

これら領主自身が従うべきはラジエヌ国王であると国法で定められており、どんな場合でも逆らつ事は許されない。

だが、それぞれの領が雇つ兵士の主人は、厳密に言えば国王でなく領主であった。

その為、国境付近にある皆の兵士達はゲート領主の命令が無ければ動かない。たとえ相手が国王であつても、領主の命令を彼らは優先させるのである。

・・・などといった理屈により、ディレイはゲートの街路で長時間の足止めをくらっていた。

「領主は今こいつに向かつてゐるらしいぜ。」

だからここでのんびり待つしかねえな」

そんな風に、幼馴染でもある将軍が笑つて報告してきた時の事を思い出す。

(本来なら、既に戦争の準備が終わっている時間だった)

予定通りにいかなかつた事への苛立ちが、ディレイの眉間の皺となる。

自国の砦への入場を阻まれてしまつた、傍から見ればマヌケな王とラジエヌ國軍。

この事実が広まれば、国内外からのディレイに対する評価が下がつてしまつ可能性がある。

「領地の出入りについては兵に指示を出していたくせに、なぜ艦についてでは出さないのだ！」

馬車の中、ディレイは一人怒鳴り散らす。

防音バッヂリな王族専用の中だからか、彼の口調にいつもの丁寧さはない。加えて言えば、いささか冷静さも欠けている。

「ちゃんと指示を出しておくべきだつたな。

手配する位の判断力はあるだろうと信用した俺が間違っていた！

（敵国侵略の情報と詰びつければ、俺が何でここに来たか分かるだろ。）

まったく・・使えない領主だ（

この苛立ちの礼は、ニシーノの奴らを追い返してからゲート領主にするところ。

ディレイは固く心に決める。

そして、未だむしゃくしゃする気持ちを切り替えようと、馬車の窓へ目をやった。

見えるのは街路の傍に乱立する木々と、木と木の間からのぞく草原の端。

(たしか、この先の草地に孤児院があつたな)

ディレイの頭に、先王の時代に建てられたゲート唯一の孤児院が浮かび上がる。

そこには戦争を起こした先王が、両親を亡くした子供達に対する償いとして建てたものだ。

住み心地と耐久性を重視して建材にこだわり、惜しみなく金が注ぎ込まれた。これら大金の出資者となつた王家と神殿には、国民の絶大な支持が寄せられたという。

(そういうえば孤児院建設を進言したのはムギナだと、父上が笑つて話していたな。・・・懐かしい)

「時間があれば行つてみるのも良い」

昔を思い出し、ディレイはつづりと微笑を浮かべた。

ふと、木々の間を歩いている・・・暗殺の奴らか?

「いらっしゃるに来ている・・・暗殺の奴らか?」

バツと腰に手を伸ばす。そこにあるのは、国一の鍛冶師が打ち上

げた至高の王剣。気難しいと評判な件の鍛冶師を納得させたのは、
ディレイの剣豪つぶりだった。

自信はある。

(負ける気はない)

木漏れ日で相手の正体がチラリと見えた。

小さく、細い身体。

「子供？・・・しかも女か」

(どうやらにじる、気は抜けないが)

暗殺者に、女や子供は多い。それは、軟弱な外見を利用して相手を油断させることができるからだ。しかも一つ一つの報酬は高く、稼ぎ口の少ない彼らに人気の職であった。

それを嫌になるほど体験して知っているディレイは、息を殺して相手を見据えた。

(相手の顔が見えたなら殺す)

そう思い、ディレイは剣を鞘から引き抜き始める。・・・が、日
の下に曝された相手を見た瞬間に、彼の身体は硬直した。

「・・・・・」

ドクンと彼の心臓が暴れ出す。

片手に収まるほど小さい顔に、庇護欲をそそる壊れそつて細い身体。

未開発な妖艶さの所為か、透明感のある白い肌に今すぐ噛み付きたくなる。

そして、それら全てがどうでも良くなるほど印象的な、金にも見える琥珀色の眼。

ディレイは直感的に確信した。

(あれこそ求めていたもの!)

彼の行動は素早かつた。

剣を再び鞘へと仕舞つや否や立ち上がり、やつと驕車の扉を押し開く。

そして扉の動きに相手が気づいた瞬間、中へと勢いよく立ちあつ込んだ。

暴れる粗手を握りしと抱きしめ、安堵の息を吐く。

(「この温もつたれば神運の舟など乗りござる。）

連れ去つて城で監禁し、誰にも見せなことにしてみや。

ディレイの思考は既に危険区域にまで到達していた。

* * *

首にかかる相手の息にぞわりと肌が粟立つた。

強烈な嫌悪感が雪を襲つ。

誰かも分からぬ人間に抱きしめられ混乱した雪は、身体に回された太い腕に狙いを定めて・・・

がぶつと思いつきり噛み付いた。

「いつ・・！」

力の緩んだ腕から勢いよく飛び出す。

しうつこりもなく伸ばされた腕を紙一重で避け、雪は馬車の扉から飛び降りた。

「ま、待てっ！」

背後から聞こえる声に耳を塞いで、まさに脱兎のごとく駆けゐ。日頃森の中を歩き回っていたお陰か、足は速い。

「はふつ、はふつ」

家が見えてきた所でよつやく足を止める雪。

今更ガクガク震え出した身体を持て余し、地面に膝をつく。

急に知らない人に触れられた事が恐ろしかった。

「ユキ様！」

真っ青な顔の雪に気づき、シユリルが走り寄る。

乾いた服を大量に持っている事からして、洗濯物を取り込んでいたのだろう。

「ユキ様、どうなさつたのです？」

しゃがんで震える雪の背をさすりつと、シユリルが手を伸ばす。

「いやつ」

パシリといつ音と共に、シユリルの手が弾かれる。

「・・・あ」

酷く悲しそうなシユリルを見て、雪は一瞬泣きそつた顔になつた。

「「」みんなさー」

小さく零された謝罪でシユリルは我に返る。

彼女が呼び止めようとした時、既に雪は森へ入つた後だった。

森の中に雪の姿が消え、シユリルの目から涙が流れる。

「私はまだまだですわ」

感情は笑顔で覆い隠す。

それが世を渡つていく為に必要な能力であり、長年上位神官を勤めてきたシユリルの得意技でもあつた。

しかしゲートへ来て雪と過「」す内に、いつしか偽りの笑顔は本当の笑顔になつっていた。

「ユキ様…お許しください。

私はもう、悲しい感情を隠せません

ほりほりと涙が落ちていく。

「隠す必要はないでしょ？」

突然の声に背後を振り返れば、ムギナが穏やかな顔で立っていた。

「・・・え？」

「私達大人の表情を見て、子供は育つのですから。
隠したら子供は表情を学べないでしょ？」

「ムギナ様・・・」

シユリルの心から、後悔が薄れて消えてゆく。

(二)の入どうして・・・いつもいつも・・・

「おや、やつと惚れてくれましたか」

「惚れてなど、おりません！」

心底楽しそうに、ムギナがクスクスと笑った。

彼に泣き顔を見られた事が恥ずかしくなり、シユリルは顔を逸らす。

「む、それは残念です。」

・・・ところでシユリル、少し相談したい事があります

ムギナの真面目になつた顔を見て、怪訝そうに顔をしかめるシユリル。

「何についてでしょうか？」

「・・今しがた到着された陛下についてです」

ばやつと足元に服が落ちる。

(ああ・・また洗い直さなくては)

頭の隅でそんな事を思った。

2.1 復興推進派（前書き）

さよなら、いつかまた。
さよなら、いつかまた。

21 仕返し推進派

「へ、陛下が到着し、したつて……まさかあの噂は本当だつたのですか？！」

目を見開いたシユリルは、空っぽになつた手を上下に振る。もはや地面に散らばる衣服など頭になつようだ。

ええ、と頷くムギナ。

「先程確かめて来ました。
ニシーノ国軍がこのゲートへ向かつてゐるといつ噂も、陛下の噂も本当のようです。

何より・・・」

中途半端に途切れた言葉に、シユリルが眉間に皺を寄せる。

「今さら隠さないで下さいまし！

何より、なんですか？」

「来ていたのですよ。兵士が孤児院に」「・・・っ！」

シユリルがハッとした表情で森に視線をやる。そこは先程、雪が入つて行つた場所だつた。

「では、ユキ様は・・・！」

「それは大丈夫でしょう」

「何故ですか！」

その兵は、きっとゲート孤児院の出身者なのでしょう。

ふるふると身体を震わせ、真っ青な顔をしてシユリルが言つ。

「そんなの私、一人しか知りませんわ！」

「奇遇ですね、私もあの方しか思い浮かびません」

そう発言するからして、彼女の言う人物をムギナも知っていたようだ。

「では・・・何故ユキ様をお止めしなかつたのです？」

「あんな目立つ色の騎士服なのですから、遠目から分からぬはずないでしょに！」

「・・・ええ、確かにすぐに分かりました」

「でしたら何故？！ユキ様が神運の子であると、もしあの方に知れたら」

「おそらく捕らえて陛下の前に突き出すでしょうね」

「分かつていらっしゃるところに、何故そこまで余裕でいらっしゃるのですか！」

激昂するシユリルにムギナは、やつぱりという顔をする。がしかし怒られているにも関わらず、相槌をつつその顔はどこか嬉しそうだ。

「シユリル。昨日の夜、私は決めたのですよ

それと騎士の件と何が関係あるんだ？そり言いたげにシユリルが冷たい視線をムギナへ送る。

「・・何を決めたと？」

彼は予想通りの冷たい反応に苦笑しつつも再び口を開く。

「先ほどシユリルは私を余裕だと言いました。
・・見て分かりませんか？これでも私は頭に相当キてているのです
が」

ハツヒシユリルが息を飲む。

□元は緩く弧を描き、確かにいつも通り優しい印象を受ける・・・
が、彼の翠の目は射るように鋭く冷かつた。

(二)の方は・・こんな表情もできたのですわね)

神殿では天使の微笑みとも謳われた表情は、今や口に名残を残すのみであった。

「シユリル、ですから協力を願いたいのです」

激情を身の中で必死に堪えているがゆえの、空氣も凍る一本調子な音程。敬語のお陰で聞く者の恐怖はいや増す。

しかし不思議とシユリルに恐怖はなく、すんなりと心に言葉が響いた。

それは、彼の激情がシユリルに向いている訳ではないからどうか。

「貴方がお辞めになつたとしても、私の永遠の上司ですわ。それにユキ様の為であると言つのなら、尚更否やは「れこません」

シユリルはきつぱりと、怒りに満ちた翠の目を見つめる。

その決意に対し、何故かムギナの目から怒りが消えた。代わりにいつもの苦笑を浮かべて、何やらブツブツと言いつつ頭を抱えている。

小さく、上司……と呟く声が聞こえた気がした。

(・・・何ですか？)

さつきから今までに無い言動ばかりつ

「・・・で、先程の私の質問には答えては頂けませんの？」

無性にイライラとする心を押さえ付け、シユリルが切り出す。

「私がユキ様のお傍に控えていたら、確実にあの方はユキ様の正体

に気がつくでしょうか？

ですから、身を隠すことを優先したのですよ」

「やついつ事でしたか……で、ムギナ様は句をなさるおつもつで？」

「ああ。簡単に言えば、陛下からコキ様の素顔を隠してしまおつて話ですよ」

「・・・」

「し、シココル？」

彼女の紺色の目は、ムギナが思わずたじろぐ程キラキラとしていた。まるで大好きなお菓子を目の前にした子供のようだ。

(「こんな彼女を今までに見たことがあったでしょうか・・・?）

いや、あるまい。愛する人の新たな一面に、思わず高鳴るムギナの心臓。

その表情が自分の事を話す時に出てくれば良いのに。ムギナは切実にそう思った。

「それ、やります！」

ぱあああッとシココルの周囲に花が咲く。

「『やあやふん作戦ですわねー』

(彼女に心底嫌われるよつた事はしません)

意気込む彼女を見て、ムギナは心中で誓った。

＊＊＊

「くくっ」

「何笑つてんですか、気持ち悪い」

馬車の中、ディレイは腕の傷を見てにやける。

その様子を気味悪そうに見やるマレーは、開いた馬車の戸枠に背を預けていた。馬車外には大量の兵達がいる為、一応口調は敬語だ。

(何だよ・・不審者つーから来たんじゃねえか)

「で、一体誰です?」

「この馬車に押し入つたつていつ奴は」

馬車の護衛兵から報告され慌てて来たものの、肝心のティレイはすつとあの調子である。お陰で、マレーのやる気は急降下。

今も一本に編んだ自分の長い黒髪を弄りつつ、だるそうに聞く。

「・・女神だ」

ぽつりと弦いたティレイに対し、片眉を上げた。

キヨロコと周囲に面する兵達を見回す。そして今の会話を聞いていないと知るや否や、馬車の中に駆け込んで勢いよく扉を閉めた。

「女抱かなさずきじ、といひといひ頭が逝つたか？」

一人きつになつた途端、マレーは態度を変えた。

しかしティレイは彼を一瞥しただけで、再び腕を見下ろし口元を緩ませる。

「とつとう見つけたのだ。

神運の子以外で私の身体を反応させる者を」

腕に痛々しく刻み込まれた傷痕を、ティレイが愛おしそうに撫でる。半円を描くそれは、おそらく歯形だらう。

(ああ、マジでこれは末期だ)

マレーは頭を抱える。

「美しかった・・・・私はあれが欲しい」

傷痕という相手の名残を惜しみ、ディレイはそこにて舌を這わせる。相手の歯の感触を思い出すように、ゆっくりと味わいながら。

「道具として妃に迎えてやるのかと思つていたが、神運の子などもう必要ない。私はあれが良い」

「本気か」

「ああ、捕らえて來い」

「・・・・・・」

そこで初めて目が合つ一人。黒色と空色が衝突する。

「・・・分かった。
で、神運の子はどうすんだ?」
「見つかるまでの身代わりにする。連れて来い
「・・・はつ」

マレーは悲しげに笑う。それを不思議そうにディレイは見る。

「お前、変わったな」

「変わつてなどいない」

「いや、変わつたつて。」

昔のディレイは、人間を道具とは考えなかつた

昔の方が良かつたと言外ににじませる。

「変わつたのは、やつぱりアレが原因だろ。」

そんなにショックだつたか？あの神運の子の姿が

「黙れ」

途端に不機嫌になるディレイ。

これ以上言つても何も答えないに違ひない。長年の経験からそれを悟つたマレーは大きなため息を吐き、諦めて馬車から降りた。

(こりゃ重症だな・・俺が見た限りじゃ、アイシもつ相当本能に引きずられてるぜ)

自分ではどうにも出来ないもどかしさがマレーを襲つ。

むしゃくしゃとしたまま、馬車近くで寝転がる自分の騎獣にヒラリと跨がつた。

それは黒く固い「ツツ」とした肌の、四本足の獣だつた。それぞれの足先から生える鈍色の爪は、一本一本がまるで小刀のように長く鋭い。鼻は顔から突き出ており、その下の口には尖つた歯が所狭しと並んでいた。

顔を捻り、ギョロリと光る紫色の目が皆に乗るマレーを見上げる。

「ジョイア、皆に向かえ」

彼の言葉を聞き、獣は皆へと音もなく駆ける。

人の言葉を解す頭の良い騎獣は、兵士達にとって一生で一度は乗りたい動物である。しかし獰猛な騎獣は扱いが難しく、更にそれに跨がつた状態で剣を操ることはもはや無謀と言われていた。

そういうた理由から一部では伝説と讚えられる騎獣。その騎獣となれる獣の中で最も難易度の高いヒルチ種が、マレーの相棒である。

皆前に着いて騎獣から降りたマレーに、兵士が一人駆け寄る。

「将軍！領主がお待ちです！」

「ああ、やっと来たか。まったく皆、べうい開けとけよ。で、アイツは今どこにいるんだ？」

「…それは副将の事ですよね？」

「そうだ」

「副将なら、先程そこそこ…」

「マーきゅん、俺なら帰つとるでえー。」

兵士の指し示した先に田をやると同時に、マレーは深いため息を吐く。

たたつと軽快に走り寄ってきた男を、マレーはとつあえず殴る。頬で鈍い音を立てられた男は、涙田でマレーに非難の視線を送った。

「いったいやんかー軽くとはこえ、こきなり殴るんは反則やうつ
「うつせえな。上司を変な名で呼ぶ奴が悪い」
「似合つかりええやん・・・で、壁トビツアリだ？」

クリーム色の髪をなびかせる男 グランヴィアは、こちつと笑つて聞く。

「あーあれはもう本能ギリギリつて感じだな」「我慢やなんて、そんなん今までしたことなかつたからや。」
「これは神運の子に一発やつ・・・つー！」

今度はグラントリックが図を殴る。

「言ひ方を考えろつてんだ」

「こつたー。

「はいはい、形だけとまことえ王妃様やからな」

マレーは呆れたようにグラントリックを見た。

(句でコマイシが副将になれるんだ・・・)

「つむ」とでマーちゃん、領主の元に行くで
「・・・おー、その呼び方は固定か」

22 狂氣と正常（前書き）

遅くなつまして申し訳ありません^○^
よつやく物語が動きます。（ゆっくりですが）
こひ。
続ければ活動報告

22 狂氣と正氣

田の前に立ちはだかる草木を前に、雪はふと歩みを止めた。
ろくに前も見ずについでいた所為か、いつもとは違ひ風景が辺りに広がっている。

(ビリ?)

唯一心を落ち着かせてくれる泉を求めていた雪は、迷い込んでしまった事に落ち込んだ。

そして先程のショーリルの顔が脳裏を過ぎり、更に落ち込む。

表情はいつも通り無表情ではあるものの、その琥珀色の田はじつとつと地面を睨みつけていた。

(もう治つたと思つていたのに・・・)

人を拒絶してしまつ衝動を、どうにか出来たと思つていた。

母親から解放され、自分はもつ過去から切り離されたものと思つていた。

そう思つてゐたのに・・・。

(もう、いや)

敵にいつまで影響され続けなくてはいけないのか。

雪は終わりの見えない恐怖を感じていた。

頭にこびりついて離れない、あの人の声。

壊れたピートオのように何度も何度も頭の中で繰り返される。

『お前みたいな子が幸せになれるなんて思わないことね。母親である私でさえ捨てるのに。お前に価値なんてない』

言葉と共に、幾む目がこすりに落とされる。雪と回しよつに光を失つた絶望の目。

暗い目は、誰かを虐げなければやつてられないと語つていた。

『 でしょ 』

敵はゆづくと微笑む。見下した笑みは間違ひなく雪に向けられ

ていた。

その思い出した母親の表情が、朝に怖いと感じたりゾンの表情と重なる。

「あ！」

思わず両手で口を覆う。

ザツキの義兄が来る」とを告げた時の表情は、過去敵が雪に毎日向けていたものだった。

道理で見覚えがあるわけだと雪は納得する。

そしてそれと同時に恐ろしくもなった。

もしかしたら、と。

(リゾンは敵とおなじ……?)

敵と同じように、簡単に人を痛めつけてしまえるのかもしれない。

今まで信じていた幸せな世界が揺れ動く。

「・・ちがう」

(リゾンは守る人。傷つけない！)

雪は自分に必死で言い聞かせた。

何も崩れてはいのだと。この世界はまだ信じられるのだとい聞かす。

「リゾンっ」

幸せな記憶を胸に、雪は初恋を捧げた彼を求めた。

今すぐ不安を消して欲しい。衝動と共に身体が前へと進む。

いつもの様に頭を撫でて、そして・・・

＊＊＊

眼前の地面に広がる赤いドレス端に、リゾンは口づける。そして終わるなり素早く後ろへと下がる。

彼の動きに、足元で土が跳ねた。

「久しいわ、アンダー。

ラジエヌの後宮で別れて以来だつたわねえ？」

「ええ。殿下も息災のよう安心致しました」

森の中、リゾンは跪いていた。いつも背に負っていた大剣は、目の前に立つ存在に対して服従を示すように前の草地に横たわっている。

リゾンの前に立つ女は、くすっと妖艶に笑んだ。

「今はリゾンと名乗つていいらししいわね」

「・・亡き者の名を借りたまで」

俯ぐリゾンの顔は女から見えない。

だが女には、今の言葉をリゾンがどんな表情で言ったか簡単に予想できた。

「亡き者、ね。フフッ。

貴方が殺した者の間違いではなくて?」

「・・・・・・

「まいいわ。

といふで、妃はどうして泣かしゃるの?」

会つのが楽しみだつたの、と辺りを見回す女。

リゾンはそんな彼女をちらりと見上げ、また顔を伏せた。

「今から連れて参ります」

大剣を片手に、リゾンは立ち上がる。彼の言動を見た女の目が愉悦に細められた。

「へえ、私が来ると知つていて連れて来なかつたの。
・・・もしかして気に入つたとか?」

「・・・・・・

「まかしても無駄よ、私には分かるわ。
だつて元恋人ですもの」
「昔の話ですよ」

表情にこそこそしないものの、リゾンの声はかなり迷惑そうだ。

「あら、つれないわね。
一人でとっても濃密な時間を過ごしたのに

女の言葉に、とうとうリゾンの顔が歪んだ。

「ねえ今何を感じてらっしゃるの？」

女が興味津々といった眼差しをリゾンの背後へとやつた。

不審に思つたりゾンも彼女の視線を追い、後ろへと視線をやる。そして彼の目が見開かれた。

「捨てられた御子様」

無表情に立つ雪がそここいた。

(ユ、キ・・)

ずくんっと胸に痛みが走る。

それは彼女の無感情な目を見たからだらうか。今までリゾンに向けた事などない、全ての喜怒哀楽が欠落した目を。

リゾンは瞼を下ろし、頭を左右に振る。

(分かつていていたことだ……非難されることなど初めから予想出来ていた)

「ね、今何を思つておられるの?」

声を辿り、再び女 リーレット・ダウオ・ニシーノ に向かう。

彼女の顔には紛れよつもない狂氣があつた。

「裏切られたとこつ悲觀かしら?

それとも絶望?

ああこれも違ひのなら、非難なのねー?」

ウキウキとした感情がリゾンにまで伝わってくるようだ。

(リゾンまで悪趣味には、なれないな)

ニシーノ国民の誰もが持つ狂氣ではあつたが、やはり王族のソレは他とは比べものにならぬこじらしき。

「ああん、焦らさないで」

一人身もだえするニシーノ王女を、呆れて見るリゾン。

しかし彼女まではないにしろ、実はリゾンも密かに答えがある

事を期待する。

怒鳴つて喚き散らして、そして壊れてしまえば良いの・・・そ
う期待するのだ。

(俺もそろそろヤバいかもしね)

リゾンは自嘲して雪を見た。

様々な感情を顔に出しながら、一人は雪の激情を含んだ絶叫を待
つ。

しかし返つて来た反応は一人の期待するものではなかつた。

「ひらきつつって?」

雪の発した問いは、現状でさえ理解できていない事がたりありと
分かるもの。

その場に渦巻いていた濃密な狂氣がピタリと動きを止める。

「…………あせまつ」

堪えきれないといった様子でリーレットが笑い出した。

彼女の目がギラリと不穏な光を宿す。

「顔は噂通りでは無かつたようですが……中身がソレでは

艶やかに紅色づいた口が歪んだ笑みを浮かべる。

何がどうなっているのか全く理解出来ていなこ顔は困惑この目を
リーレットへと向けた。

何かの感情を持つには理由が必要。

(まだユキの中には怒る理由も、憎む理由もないんだ)

事態の渦中に屈ながら、全く変化を出来ていない。

まるで子供のような雪の描いた面動じ、リゾンの中で膨れ上がりついた狂氣が引いていく。

(誰かがユキを守りないと……)

唐突に浮かんだその思考はすぐに消えた。

しかしその後もリゾンの中の狂氣は失せ続ける。

匪いでゆく心に対応しきれず、リゾンは困惑した。すぐ右に現れた、膨大な殺氣を纏つ『配にさえ氣づく』ことが出来ぬほどに。

「まだ分からぬわけ？」

苛立つような子供の高い声が辺りに響く。

23 戦争の理由（前書き）

お待たせしました m () m
久しぶりすぎて、焦ります。

23 戰爭の理由

現れたのは灰目に赤髪の可愛らしい少年と、その数歩後ろを歩く美女だった。

一人とも派手な赤い軍服を身につけている。

周りにある景色に縁が多い所為だらうか。いきなり現れた赤で雪の目がチカチカした。

(・・・)

しばらくしてよつやく色に慣れた目で見ると、一人の片方に見覚えがあった。

「アリス？」

少年の後ろにいるアリスを見て、何故ここにといった表情で首を傾げる雪。

当のアリスは雪と目線を合わせず素知らぬふりをしていた。笑みを浮かべた彼女の黄緑の目が見る先にはリーレットがいる。

アリスを見ていた雪の視界に突然赤髪が現れる。その色につられて下に目線を移した雪は息を飲んだ。

「・・・つー

さつきまで離れた場所に立っていた少年が、いつの間にか雪の近くにいたのだ。雪は少年から視線を外して後退る。

(こわいのは嫌!)

未知の人間にに対する恐怖が雪を襲つた。その所為か本人の意思とは関係なく身体がガタガタと震えだした。

彼女の視線は助けを求め、既知であるアリスとリゾンへと向けられた。

そんな雪を少年はじっと見上げている。雪を見る彼の灰目は嫌悪感に満ち、鋭く雪を貫ぐ。

「初にお目にかかる。私はリーレット様付き闇隊長エフと言つ。
・・もう一度聞くが、これを見てもまだ分からないうといふのか
?」

雪は少年 エフの顔を恐る恐る伺う。エフは、黒々とした光が相手の目の中で揺れるのを見た。

そして彼はますます苛立ちを顯わにする。

(うつとうじい目だ!)

せつせと理解して光など失せてしまえば良いのにつ()

ますます鋭くなる灰目に、雪は再び身体を震わせる。

「・・・ジビも、」わい

「子供ではない！」

エフだ！」

間髪入れずに答えるエフ。彼の背後でリーレットが高らかに笑う。リーレットの近くにいるアリスも顔を背け、身体を小刻みに震わせる。

絶賛片想い中の人や部下に笑われ、エフはますます殺氣を濃くした。

「お前は本当にこの状況が分かつていないのでな！

ラジエヌ国王に捨てられたのも頷ける、この愚図めつ

「・・エフ、おやめ。仮にも相手は妃ですわ。

やり返したいのなら、全てを教えて差し上げれば良いこと。違う

？」

笑い声を止めたリーレットがいたか厳しい声を上げる。

主の命令に従順なエフはリーレットを見、確かにその通りですねと頷く。一つ息を落とした彼は雪への向き直る。

そこに剥き出しだつた殺氣や怒氣はなく、ただ子供らしからぬ匪
いだオーラを纏っていた。

「では現状から言おう。今おま・・否、妃のおられたラジヌと、
隣国ニシーノは争おうとしている。

それは神によつて分かたれた民を再び一つにする為だ」

声が朗々と森に響いた。

突然始まつた長い言葉に、雪はなんと反応して良いか分からなか
つた。

「・・・・・」

「遙か昔ニの大陸には一つの国しかなく、悦楽の民と狂氣の民は結
婚し血を混ぜ合つて互いの衝動を殺してきた。
しかし突然國は分かたれた」

Hフは顔を上げて空を睨みつける。

「大陸の中央に見えない壁が現れ、一種いた民は壁の左右にそれぞ
れ閉じ込められた。

一種の民が持つ衝動は互いによつてしか押さえられない。悦楽の
民は同族と悦楽に溺れ、狂氣の民は同族相手に殺し合つ」

「・・・・・」

「・・・また世は混沌」

雪は話の内容を完全に理解できなかつた。だが殺すという言葉だ

けが強く耳に残つた。

「そんな中、何故か片方には民の特性を抑える薬 神運の子が落とされた。落とした神は、我もとするもう片方の民に神運の子を捕まえれば良い」と言つて笑つたそうだ。

悦楽の民、ラジヨヌ国民はもつ忘れてしまつたのかもしない。だがニシーノ國にはその語り継がれている」

「・・・とくせこをおさへる・・くすり?」

「そり。

でも我らニシーノが求めるのは薬ではない。我らが求めるのは

空から雪へと顔を下ろし、Hツは身の内にあつた狂氣を解き放つ。

「壁の消失」

そう言つて笑んだ彼は懐をまさぐり、ナイフを一本取り出す。

「民を分かつ壁には消失する時がある。

先代の神運の子を迎えた王が死んでから、王と新しい神運の子が初夜を迎えるまでだ」

これまでの神運の子は、一田惚れした王によつてすぐさま純潔の花を散らされてきた。

だから消失の期間はさほど無い、戦争を起しますまでには至らなかつた。

だからその僅かな期間を使い、ニシーノは暗殺者を送り出す。何度も何度も。

「暗殺者の一族」と送り込み、ずっと狙い続けてきた。

しかしついに時が来た。初夜を迎えることのない神運の子が来て、消失の時間が延びたのだ

「フフはナイフの刃を、見せつけるように舐める。

「初夜を迎える」とがなければ、壁は消失したままでしょう?だからまあ

「ヤリと彼は笑う。

理解できなくて困惑する雪の背中に、鳥肌が立つた。

「死んで?」

フツと少年の姿が雪の視界から焼き消えた。

耳をつぶざく金属音が辺りに響き渡る。

23 戦争の理由（後書き）

ハーフが一生懸命話したことの想像するに、思わずしゃべりはじめる。

雪にとつてソレは、身体の真が震えるような音だった。

(・・なに、が)

雪はナイフを向けられた恐怖と驚きで口を開じていた。

「ユキ、大丈夫？」

優しく気遣う声が頭上から聞こえ、そつと口を開けていく。そして自分の置かれた状況を知るなり、それは限界まで開かれる。

「・・リ・・ゾン？」

体温が移る。

トクンと脈打つ音を間近に聞いて、よつやく雪は自分が背後から抱きしめられていると悟った。

(さつき何かにひっぱられた・・リゾンだったの?)

リゾンの左腕は雪の腹を抱き、右腕は彼女の口の前に大剣を垂らしている。

(温かい)

凝り固まっていた雪の表情が緩む。

「貴様っ」

リゾンに阻まれ歯ぎしりするエフ。雪には分からなかつただろうが、彼には全てが見えていた。

首を搔き切る数瞬前、リゾンは彼の獲物 雪 の背後に現れた。そして片腕で雪の手を引いて抱きしめ、もう片腕の大剣の平でナイフの切つ先を受け止めたのだ。

「貴様、元闇のくせに裏切る氣か？」

エフが身じろぎする度、剣にめりこんだナイフの先がガギガギと嫌な音を立てる。

(もたなかつたかー···
ナイフと大剣なのにやるなあ)

自分の相棒にヒビが入っているのを見ながら、リゾンは彼に軽く言い返す。

「今はユキの護衛なんだよねー」
「頭を垂れ、リーレット様に恭順の意を示していたではないか！」
「あれはねー···別れの合図？」

「ふざけるなっ」

大剣からナイフを引き抜き、ゆるりと怒氣を立ち上らせるエフ。彼の凄まじい形相に、雪は身体に緊張をみなぎらせた。

トン、トンと落ち着かせるようにリゾンが雪の腹を叩く。

「リーレット様」

エフが静かに主の名を呼ぶ。緊迫した状況だというのに、ゆるりとリーレットは笑んでみせた。

「何を言いたいのかは分かつてしますわ。

アンダー、貴方本当に戻つてくる気はないの？

愚かなラジエヌ国王の側に妃がいない今、我が国が戦争に勝つことは明白ではなくて？」

リーレットの深紅の目が、リゾンの同色なそれを見つめる。笑顔を浮かべてはいるものの、彼女の目には言い逃れを許さぬ厳しい光がある。

それを端から見てしまった雪の身体がぶるりと震えた。

しかし向けられた当の本人はただ笑っている。

「さつきも言ったんですけどー、アンダーって何のことですか？俺の名はリゾンでーす」

そう言いながら、彼は左腕一本で雪の身体を抱き上げる。親が子を抱くようなそれは、雪が体験したことのないものだった。

(な、なに?)

一本の腕に座るとこうバランスの悪さで、雪は田の前の肩を掴む。

「ユキ、そのままちゃんと掴まつてねー」

リゾンは内緒話でもあるかのように耳元で囁いた。ほんのり顔を赤らめた雪は、琥珀の田をつりつかせながら頷く。

一人の様子を見て、リーレットはため息を吐いた。アンダーだった頃の彼ならば、ああこつ足手まいになりそうな子供は切り捨てていたのに、と。

「それが貴方の答えですか・・・エフ」

「はい、彼らは私にお任せを。

アリスは主を守れ

「はいはーい。隊長、ちっちゅこからつて負けんじゃないよ

アリスの言葉で、ナイフを手に切り掛かるとしたエフは脱力した。

「・・お前はしゃべるなとあれほど言つただろ?」

「だから今まで黙つてただろ?」

「じゃあ最後まで黙つてろよ。」

お前のせいで空氣が台なしだつ

「殿下、行きましょ?」

「聞け『ワカタツ』」

ぐだらない敵同士のやり取りを前に、リゾンは好機と走り出した。

「あ、ちゅ、逃げるな！」

一瞬遅れで気配が追いつけてくる。極限まで薄められた気配と口笛に、流石だとリゾンは笑った。

（奴が相手なら、きっとかなりいい戦いができるだろーしね）

木々の間をすり抜け、舌なめずりするリゾンの耳に狂気が舞い戻る。

「隊長と元隊長の戦い、見たかつたんですけど」

リーレットの半歩後ろを歩いていたアリスは残念そう言つた。

「確かに見ござったえはありそ�ですわ。

アンダーは私の闇になる前、父上のお氣に入りでしたし」

「陛下の？」

「あの頃王座が赤くならなかつたのは、きっとアンダーが父上の相手をしていたからでしょうね」

その言葉にアリスが感心のため息を漏らす。

幼かつた時に一度だけ見た王とアンダーの戦いを思い出し、つゝとりと紅眼を細めるリーレット。

(あれは・・本当に美しかつたわ)

と、彼女は唐突に足を止めてアリスに向き直つた。

「・・・・ねえ、貴女は知つてゐるかしら?..」

彼女に従つて立ち止まり、アリスは首を傾げる。

「何をですか?..」

「妃が変わる度にできる境はとても厚いのよ。

透明だから本当に厚いのかなんて誰も知らないけれど。境を通してた視界は、厚い氷を通して見るみたいにぼやけるのですって」

「・・・はあ」

何が言いたいのか分からず、言葉にもならない息がアリスの口から出る。

それを尻目に、リーレットは何故かぐるぐるつと足を軸にその場で回り始める。

背景が緑豊かな所為か。ただ回っているだけなのに、まるで踊っているかのように赤が美しい。

「だからきっとこらも境になるわ」

「そう・・ですか」

楽しげに言づコーヒーに、分からなゝままとりあえずアリスは頷いた。

そんな彼女を見て、リーレットは回るのを止める。

二つの間にか、向き合つ一人の距離は離れていた。

「貴女も、もう帰つて良いのよ?」

温度のない笑みと共に放たれた言葉に、二人を取り巻く空気が凍る。

アリスの虚ろに変わった黄緑色の目がリーレットを睨む。

「いつから・・いつから氣づいていたんだい?」

「ふふ、さあ、いしょっからよ。」

主でもない私に今まで付き合つてくれたこと、感謝するわ

「・・間諜のアタシを殺さないのかい?」

「あははっ! 私に殺される気なんかないでしょ!」

それに私は今丸腰だわ、ヒリーレットは笑つた。

「じゃあアタシに殺されるとは思わないのかい？」

「きつと貴女の従う命令には入つていないでしょ?」

「喰えない人だ。・・どうせなら隊長が居る時に言えば良かつただ

りうて」

「あら、言つて欲しかつた?

けど残念ね。どうせ言つてもあの子は負けるもの」

笑顔で淡々と言つリーレットに、アリスは怪訝そうな顔をする。

「何でそつ思'うのや」

「貴女には分からぬでしょ? けビ、ニシーノの民の強さは狂氣の大きさで決まるの。

アンダーの狂氣は妃で薄れているから、あつとアンダーの辛勝ね。
・・もしかしたら死んじやうかもしれないけれど。
でも、それで境ができるかもしれないわね

「何だつて?」

(それで境ができるって、どうこいつことだ?

さつきHフが初夜を迎へなれば、境はできないと・・)

ますます不可解そうな顔をするアリスをリーレットは高らかに笑つた。

「あらあらー見て分からなかつた?
やつぱり心つて傍で守つてくれる男の方に傾くのよ。妃も人間つてことかしらね。

そんな大切な人が死んだら、誰でも悲しんで安全を願うわ。愛しが願えば神だって動くでしょ？」

（まさか、ユキはあの男を・・・）

アリスの顔がハッと目を見開く。

その表情を満足げに見たリーレットは、踵を返してニシーノへと歩き始める。

「あら」

しかしまた突然、リーレットは立ち止まって声を上げた。アリスはそれにつられて彼女の背中を見る。

「でもきっと境ができた方が、貴女たちにとつて不幸ね」

ぽつりとそう言い残して、彼女は一人国境を越えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2010k/>

神運の子

2011年6月23日13時49分発行